

新町原田南遺跡

昭和63年度団体営圃場整備事業

新町地区に伴う発掘調査報告書

1984

長野県辰野町教育委員会



序

近年、八ヶ岳西南麓では圃場整備事業が多く実施され、貴重な遺跡が消滅しています。

辰野町内においても、圃場整備事業が頻繁に実施され、これまでに多くの遺跡が姿を消してきました。原田南遺跡も、圃場整備事業に先立って調査が実施された遺跡です。

新町区においてはこの遺跡調査以前には開発によって消滅した遺跡はありませんでしたが、この圃場整備事業を皮切りに、平成6年度に完成した工場団地の造成事業に至るまで多くの開発が実施され、また、多くの遺跡の調査が行われてきました。

現代の人間の生活が優先されるゆえに消えていく遺跡をせめて記録として残していこうという消極的ではありますが貴重な作業が発掘調査といえます。

今回の調査においても、記録に残っていない中世の館跡の発見をはじめとして数多くの成果をのこして調査を終了することができました。

地方の時代といわれている今こそ、このような貴重な成果を基礎として私たちの故郷を見直していくことは、非常に重要なことと思われまます。

その意味においても郷土の歴史に新たな1ページを飾るに相応しいこの調査報告書をぜひ活用して頂くことをお願いして序とします。

平成7年3月

辰野町教育委員会

教育長 小澤幸彦

例 言

1. 本書は団体営園場整備事業新町地区に先立って実施された長野県上伊那郡辰野町大字伊那富4556番地外に所在する新町原田南遺跡しんまちばらだみなみの発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は辰野町教育委員会が実施した。なお、発掘調査の組織については発掘調査関係者名簿として別掲した。
3. 掘調査は昭和63年5月19日から同年10月7日まで現場の作業を行い、平成6年4月1日から平成7年3月10日まで遺物等の整理及び報告書の作成を行った。
4. 発掘現場における記録は福島永が担当し、遺構等の実測図の作成は赤羽やよい、村上茂子、田畑幸雄が主として行い、遺物等の実測図及びトレースの作成は赤羽弘江、大槻直子、大森淑子、佐藤直子、白鳥栄子、竹内みどり、平沢正子、矢島尚、福島永が行った。なお、土器復原は福沢幸一氏にお願いした。
5. 調査時の遺構番号と本報告書の番号は一致していないが、本書の番号を正式なものとする。

発掘調査関係者名簿

1. 新町原田南遺跡発掘調査団

調査団長 友野良一（考古学研究者、宮田村）発掘担当者

調査員 福島 永（辰野町教育委員会社会教育課文化係）

発掘調査協力者 赤羽信雄、板倉たせ子、伊藤正之進、植村翠、垣内諭、上島元彦、倉田守
倉田まき子、桑沢とよ子、小松祐二、城倉けさみ、瀬戸貴美雄、茅野安夫
中谷あき子、松田信太、村上武夫、村山明、百瀬茂久、矢島郁夫
山内志賀子、山崎馨、山崎繁夫、山崎長雄、山崎良之助、横川常一

整理作業協力者 赤羽弘江、宇治ひろゑ、大槻直子、大森淑子、工藤信子、佐藤直子
白鳥栄子、竹内みどり、田畑三千代、平沢正子、村上茂子 矢島尚

2. 辰野町教育委員会事務局

教育長 小林晃一（～H.5年10月）小澤幸彦（H.5年10月～）

社会教育課長 小松弘茂（～H.元）三浦正義（～H.2）赤羽八州男（～H.3）
赤羽武栄（H.4～）

文化係長 平泉栄一（～H.5）三浦孝美（H.6～）

文化係 赤羽義洋、田畑幸雄（～H.3）福島 永

目 次

序

例 言

第1章 調査の契機と経過

第1節 保護協議の経過 1

第2章 位置と環境

第1節 地形・地質 3

第2節 歴史的環境 5

第3章 発掘調査

第1節 調査の方法と調査結果の概要 8

第4章 遺構と遺物

第1節 住居址 9

第2節 土 坑 27

第3節 集 石 42

第5章 その他の遺物

第1節 遺物集中区出土遺物 44

第2節 遺構外出土遺物 46

第3節 中世の居館址 73

第6章 ま と め 76

写 真 図 版

別図 新町原田南遺跡全体測量図1

新町原田南遺跡全体測量図2

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図 2

第2図 周辺遺跡分布図 4

第3図 遺跡周辺水系図 6

第4図 城館跡分布図 7

第5図 第1号住居址出土遺物(1) 9

第6図 第1号住居址実測図 10

第7図 第1号住居址出土遺物(2) 11

第8図 第1号住居址出土遺物(3) 13

第9図 第1号住居址出土遺物(4) 14

第10図 第1号住居址出土遺物(5) 15

第11図 第1号住居址出土遺物(6) 16

第12図 第1号住居址出土遺物(7) 17

第13図 第2号住居址実測図 18

第14図 第2号住居址出土遺物(1) 20

第15图	第2号住居址出土遗物(2)·····	21	第42图	遗構外出土土器(2)·····	49
第16图	第2号住居址出土遗物(3)·····	22	第43图	遺構外出土土器(3)·····	50
第17图	第3号住居址実測図·····	22	第44图	遺構外出土土器(4)·····	51
第18图	第3号住居址出土遗物·····	23	第45图	遺構外出土土器(5)·····	52
第19图	第4号住居址実測図·····	24	第46图	遺構外出土土器(6)·····	53
第20图	第4号住居址出土遗物·····	25	第47图	遺構外出土土器(7)·····	54
第21图	第5号住居址実測図·····	26	第48图	遺構外出土土器(8)·····	55
第22图	土坑実測図(1)·····	28	第49图	遺構外出土土器(9)·····	56
第23图	土坑実測図(2)·····	29	第50图	遺構外出土土器(10)·····	57
第24图	土坑実測図(3)·····	30	第51图	土製円盤(1)·····	57
第25图	土坑実測図(4)·····	31	第52图	土製円盤(2)·····	58
第26图	土坑実測図(5)·····	32	第53图	出土石器(1)·····	60
第27图	土坑実測図(6)·····	33	第54图	出土石器(2)·····	61
第28图	土坑実測図(7)·····	34	第55图	出土石器(3)·····	62
第29图	土坑実測図(8)·····	35	第56图	出土石器(4)·····	63
第30图	土坑実測図(9)·····	36	第57图	出土石器(5)·····	64
第31图	土坑実測図(10)·····	37	第58图	出土石器(6)·····	65
第32图	第137号土坑出土遺物·····	38	第59图	出土石器(7)·····	66
第33图	第57号土坑出土遺物·····	38	第60图	出土石器(8)·····	67
第34图	土坑出土遺物(1)·····	39	第61图	出土石器(9)·····	68
第35图	土坑出土遺物(2)·····	40	第62图	出土石器(10)·····	69
第36图	土坑出土遺物(3)·····	41	第63图	出土石器(11)·····	70
第37图	集石実測図·····	42	第64图	出土石器(12)·····	71
第38图	集石出土遺物·····	43	第65图	出土石器(13)·····	72
第39图	遺物集中区出土遺物(1)·····	44	第66图	出土石器(14)·····	73
第40图	遺物集中区出土遺物(2)·····	45	第67图	出土鉄器·····	74
第41图	遺構外出土土器(1)·····	46	第68图	堀土層断面図·····	75

第1章 調査の契機と経過

第1節 保護協議の経過

新町区は卑土の仮面付土偶が出土しているなど辰野町において考古学的には非常に重要な地区といえる。

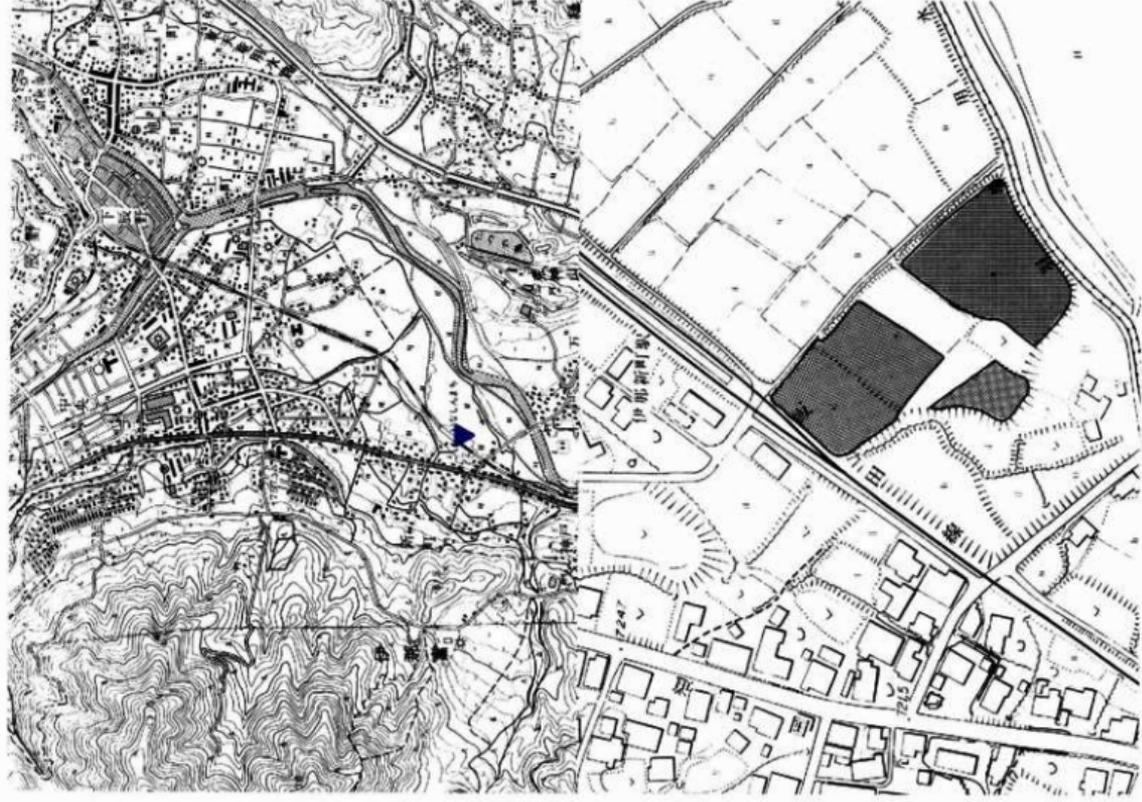
昭和62年4月20日に町農政課より「昭和62年新期採択土地改良総合整備事業に伴う埋蔵文化財の調査について」の協議書が提出された。この協議書によると、圃場整備事業の開始予定は昭和63年度で、開発規模は、およそ11haにおよんでいた。この圃場整備事業の範囲内には、新町原田南遺跡、新町原田北遺跡、新町大原遺跡の3遺跡が存在しておりこの3遺跡が消滅する恐れが生じた。これに対して町教育委員会では、遺跡の現状を把握するため、昭和62年度事業として試掘調査を行い、遺跡の範囲、規模等について確定していくこととした。同年5月20日付で町農政課より3遺跡の発掘についての通知が提出されたのをうけて3遺跡の試掘調査を5月25日より実施した。

試掘調査の結果、新町大原遺跡からは、縄文時代の炉址をはじめとした縄文時代の遺構が発見され、新町原田北遺跡では、試掘のグリッドの数に制限があったものの、縄文時代中期の住居址や、平安時代前半期の住居址をはじめとして縄文時代、平安時代の遺物なども発見された。

新町原田南遺跡については、中世末期の陶磁器をはじめ、堀の跡が発見され、居館址の存在を示していた。しかし試掘グリッドの数が9か所でしかなく、遺跡の実態については十分把握する事ができなかったため、翌年圃場整備事業に伴っての休耕を待って試掘調査を実施した。

4月23日より5月22日まで試掘を実施した結果、中世の堀と思われる遺構が出土したほか、縄文時代中期末葉の住居址1基、柱穴等が出土し、この遺跡が縄文時代から、中世にかけての複合遺跡であり、圃場整備事業対象地域全面にわたって分布していることがわかった。

そのため、農政課より設計上の切り盛り図の提出を求め、その設計に基づいて切土の箇所と盛土の箇所を確定し、農道として使われる部分と盛土の予定の部分に関しては遺跡の破壊の恐れがないと判断して調査対象地区から除外し、切土の地区のみを調査対象とすることとし、5月24日より重機を投入しての本調査へ移行した。



第1圖 遺跡位置圖

第2章 位置と環境

第1節 地形・地質

辰野町は西を木曾山脈の最北部にあたる経ヶ岳（標高2,296.3m）より連なる標高1,100m以上の6つの山塊が占め、東には伊那山脈の北端部が延びている。伊那山脈は天竜川の支流の一つである沢底川を境として、南部は標高700～1,200mの小式城山塊、北部は標高800m～1,000mの東山丘陵に二分されており、なかでも東山丘陵は辰野町でもっともなだらかな丘陵状の山地となっている。

辰野町は伊那谷の最北部ということもあり、天竜川の氾濫原から山裾部までが狭い。さらに天竜川西部には、その支流である経ヶ岳に源を発する横川川によって形成された横川溪谷に代表されるようなV字谷が深く入り込んでいる。

また辰野町の境界付近を含めた権兵衛峠—経ヶ岳—牛首峠—霧きり訪山—善知鳥峠うととの連なりは、これより北部は千曲川水系として日本海側へと流れ込み、南部は天竜川水系として太平洋へ注ぎ込む南北分水界となっている。

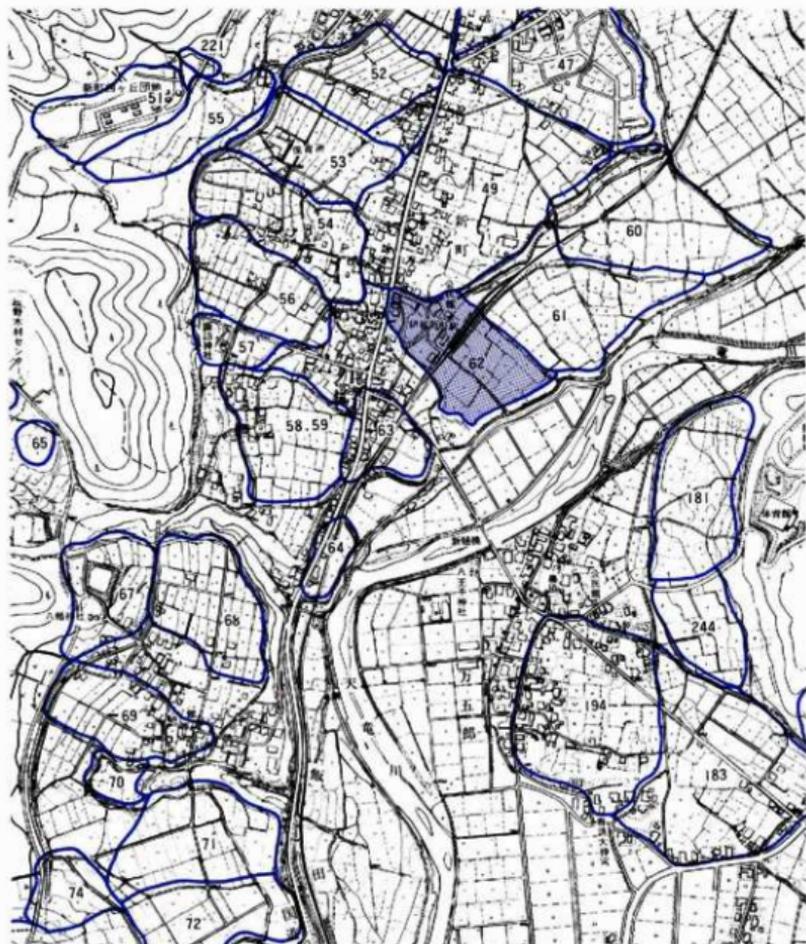
一方、諏訪湖に源を発する天竜川は、町を南北に縦断するように南流し、その両岸には数段の河岸段丘を形成している。また、天竜川西岸、特に権けん沢山—桑くわ沢山山麓では扇状地が重なりあった複合扇状地が形成されている。

新町の集落の一部は鳥居沢がつくった扇状地の上の上っている。また、新町西方の明神山は古い扇状地が断層活動によって持ち上がったものである。

また、伊那盆地の西部や東部の山麓には大きな断層が走っており、特に西部山麓の断層は「伊那谷断層」と呼ばれ、後山地籍においては断層によって尾根が孤立し、稜塚と呼ばれる丸山が形成されている。

さらに、新町の上水道水源地の掘削では昭和4年に春日塚美によってテフラを切る断層が観察され、スケッチに残されているが、このスケッチをみるとテフラの降灰が停止してから15,000年の間に西方の山地が約2.3m上昇したことがわかる。また、新町の天竜河畔の赤洗より、天狗坂を通過して宮所、上島を結ぶ線は赤洗断層と呼ばれ、宮木の太新田より新町の原田地籍へ上がる坂で断層によって原田の地盤がはね上がった様子が観察されている。

新町原田南遺跡は前述のはね上がった原田地籍上に位置しており、新期テフラをのせた段丘上である。また、この遺跡の東には天竜川が流れ、この川を挟んで荒神山が手にとるように見ることが出来る。一方南には、比高2～3mという深い崖を形成している五軒屋川をはさんで、羽場城、そして東の奥には小式城、そして遠く伊那盆地が見渡せる位置であり、居館址を構えるには絶好の地点といえる。



- | | | | |
|----------|-----------|----------|---------------|
| 47: 上原 | 56: 宮垣外 | 63: | 71: |
| 49: 新町北原 | 57: 諏訪神社前 | 64: | 74: 向袋 |
| 51: 榊林 | 58: うずらい北 | 65: 新町丸山 | 181: 荒神山山西 |
| 52: 泉水 | 59: うずらい南 | 67: 神戸 | 183: 荒神山おんまわし |
| 53: | 60: 新町大原 | 68: | 194: 下田 |
| 54: 青木原 | 61: 新町原田北 | 69: | 221: 榊林第二 |
| 55: 曾利畑 | 62: 新町原田南 | 70: | 244: 樋口北原 |

第2図 周辺遺跡分布図

第2節 歴史的環境

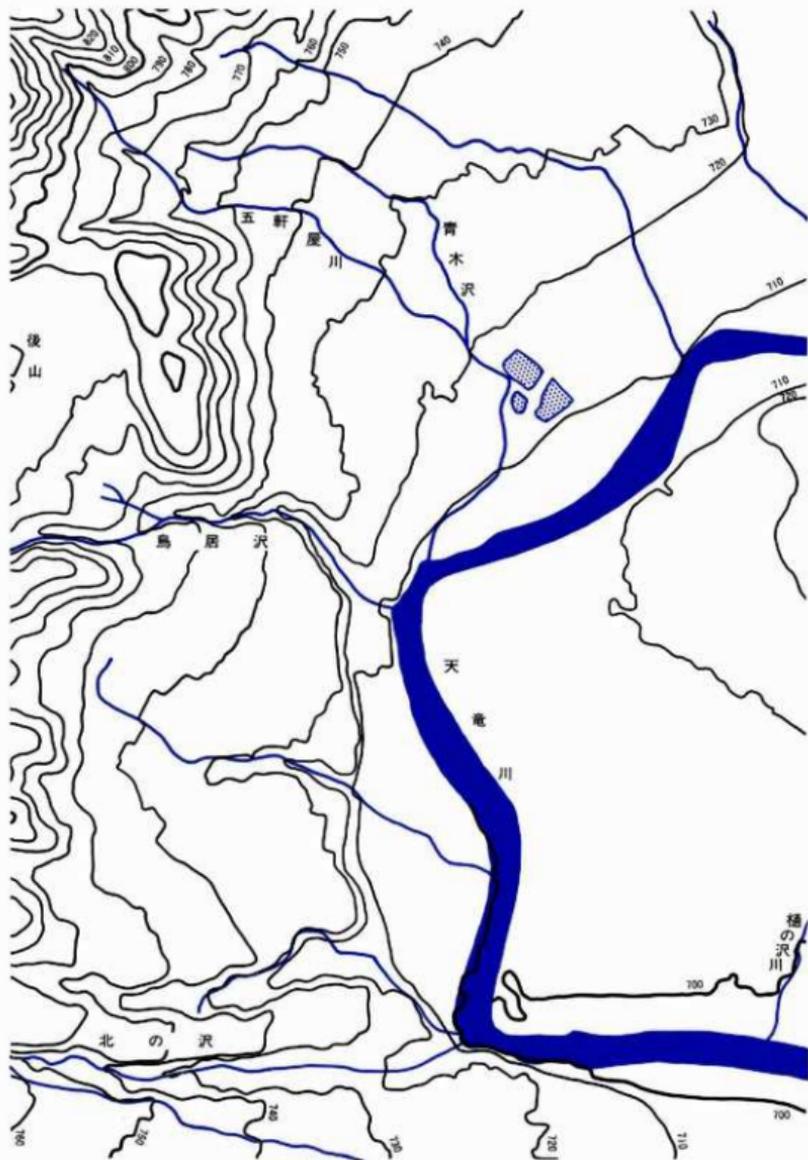
新町区は昭和10年の開田の際に泉宝に指定されている縄文時代後期の仮面付土偶が出土している泉水遺跡(52)が所在する地区である。新町区は経ヶ岳山塊の檜沢山と天竜川に挟まれた地域で、遺跡の立地も、扇状地上に位置する泉水遺跡、神谷所遺跡(66)等と河岸段丘上に位置する新町大原遺跡(60)、新町北原遺跡(49)、うずらい北(58)・うずらい南(59)遺跡等に大きく2分される。前述の泉水遺跡は扇状地上に存在しており、土偶のほかは遺物も十分に採集されていないために遺跡の状況は不明である。神谷所遺跡は平成3年度から平成6年度にかけてほぼ全面を調査した結果、縄文時代早期の押型文をはじめ、縄文時代前期末葉の住居址、弥生時代後期の住居址、平安時代の住居址、中世の建物址等が出土している。なかでも弥生時代の住居址は長辺約3m、短辺約2mといったような小規模な住居址が主で、埋燵の3方向に石囲が施されているものがほとんどであった。

また、この遺跡に隣接する新町丸山遺跡(65)の東の畑から、中世の鉄製釜が昭和32年に出土している。新町丸山遺跡は、当初古墳ではないかとの疑いが持たれたが、この小山は活断層によって断ち切られたいわゆるケルン・バットであることが確認されている。いずれにしても神谷所遺跡の中世と思われる建物址と鉄製釜との関わりについては今後の検討課題といえる。

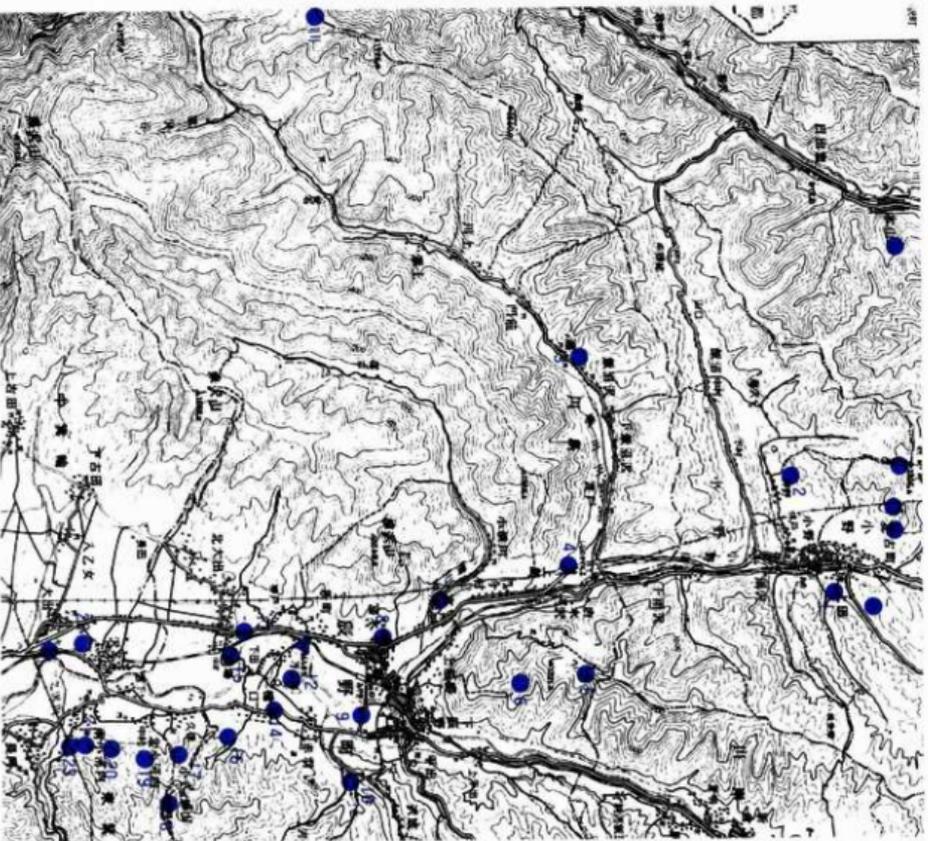
一方段丘上に立地する新町大原遺跡は、昭和63年度に新町原田南と共に圃場整備に先立って調査が実施された遺跡で、縄文時代早期の押型文土器・条痕土器をはじめ、縄文時代前期末葉の住居址1基、中期中葉の住居址13基のほか、中期末葉の住居址1基が出土している。これらのうち、第8号住居址には壁際に大型の礫を使用している祭壇状の施設が発見されている。また、集落の中央部と思われる地点には有孔銅付土器が単独埋設されており、土偶、石棒の出土と考え合わせると、縄文時代中期中葉の集落解明のための良好な資料となりえる成果をおさめている。その他、中世かと思われる掘立柱建物址も出土している。

また、うずらい北・うずらい南遺跡は平成5年度に区画整理に先立って調査が実施され、縄文時代前期の焼土を伴う土坑が1基出土している。この遺跡は試掘した結果ではこれらの遺跡の南に西流している烏居沢の氾濫の痕跡が認められ、地形的に不安定な地域といった様相を示している。

その他山麓に立地している遺跡として榊林遺跡(51)があげられる。この遺跡は檜沢山麓のわずかな平坦部に位置し、昭和61年と平成元年に調査が行われ、縄文時代早期から後期にわたる遺構が出土している。なかでも押型文土器を出土した住居址1基や深さ2mに近い円形の大型竪穴や、集石炉10基が出土しており、この地区が押型文時代にベースキャンプ地として利用されていたことを伺わせる。また、縄文時代前期から中期初頭の小型穴群と、後期の土坑が発見されているのはじめ、縄文時代中期末葉と思われる壺形土器が出土し、この中から黒曜石の大型のかたまりが発見されるなど、比較的小規模な遺跡にもかかわらず縄文時代の遺跡として非常に貴重な成果をあげている。



第3図 遺跡周辺水系図



- | | | | |
|-------------|--------------|----------|----------|
| 1: 上田館 | 7: 城山 (竜ヶ崎城) | 13: 羽場城 | 19: 城 基 |
| 2: 小西城 | 8: 天白の城 | 14: 樋口内城 | 20: 豊久保 |
| 3: 市河 (横河?) | 9: 古 城 | 15: 羽場城 | 21: 日輪寺畑 |
| 4: 大庭 (横河?) | 10: 堀の内 | 16: 狐 城 | 22: 古 城 |
| 5: 陣場ヶ原 | 11: 瀬戸城 | 17: 寺 山 | 23: 上の平城 |
| 6: 大 城 | 12: 荒神山 | 18: 小式方城 | |

第4図 城館跡分布図

第3章 発掘調査

第1節 調査の方法と調査結果の概要

原田南遺跡は辰野町遺跡地図によると、縄文時代と平安時代の遺物散布地として掲載されているものの実際には水田ということもあり、遺構の保存状態については判然としていなかった。そのため磁北にそって2 m×2 mのグリッドを設定し、10m 四方について1ヵ所を基本として試掘調査を実施した。

この試掘調査の結果、縄文時代の住居址のほか、居館址の堀と思われるものも検出された。このため、当初予想していた時代のほか、中世の居館址も出土する可能性がでてきた。これらの結果をふまえ、開発対象区域のうち、掘削部分について本調査を実施し、耕作土の削除のみの部分については調査対象外とした。

この地域は水田として使用されていたために耕作土より下層についてはほとんど破壊はされていなかったため、重機によって耕作土のみを剥ぎ、以下を手作業によって掘り進めた。なお、堀については調査期間の都合により、上層については重機によって掘り下げを行った箇所もある。

遺構の検出についてはジョレン等を使用し、遺構の掘り下げについては移植ゴテ等を使用した。なお、土坑などは半割の状態掘り下げ、住居址や堀等は土層観察畦を残して遺構内の土層観察と記録につとめた。

本調査に際しては任意の基準点から磁北にそって10m 四方の基準方眼を設定し、この1基準内を25ヵ所のグリッド(2 m×2 m)に細分設定した。グリッドは基準点から南北方向を数字、東西方向をアルファベットで表現した。

出土遺物の取り上げは表土から遺構確認面まではグリッド別に行い、遺構内の遺物は各遺構別に取り上げ、必要に応じて(住居址の床付近出土遺物など)適宜出土位置やレベルを記録し、図化や写真撮影を行ったものもある。整理段階で遺物台帳を作成し、各遺物には出土遺跡と遺物番号を注記した。現場での写真撮影は一眼レフカメラを2台使用し、モノクロームネガフィルムとカラーポジフィルムを用い、出土遺物の撮影には大型カメラにより、6×9モノクロームフィルムを使用した。

今回の調査の出土遺構、遺物の概要は巻末の遺跡報告書抄録に記している。

なお、現場での遺構番号と報告書の遺構番号が統一されていないが、本報告書における遺構番号を正式なものとする。

第4章 遺構と遺物

第1節 住居址

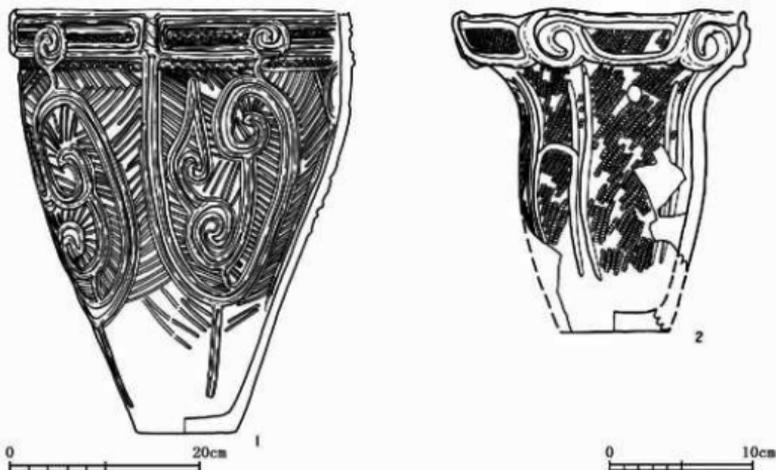
第1号住居址

この住居址は、第2調査区の最南端に位置しており、南西壁については土手の崩落によって破壊されている。規模は4 m×4.7mの隅丸方形で直線部がやや外に張り出しており、南西部分には埋甕が埋設してある(第5図1)。柱穴はP.1(深さ40cm) P.2(37cm) P.3(39cm) P.4(40cm)と考えられる。

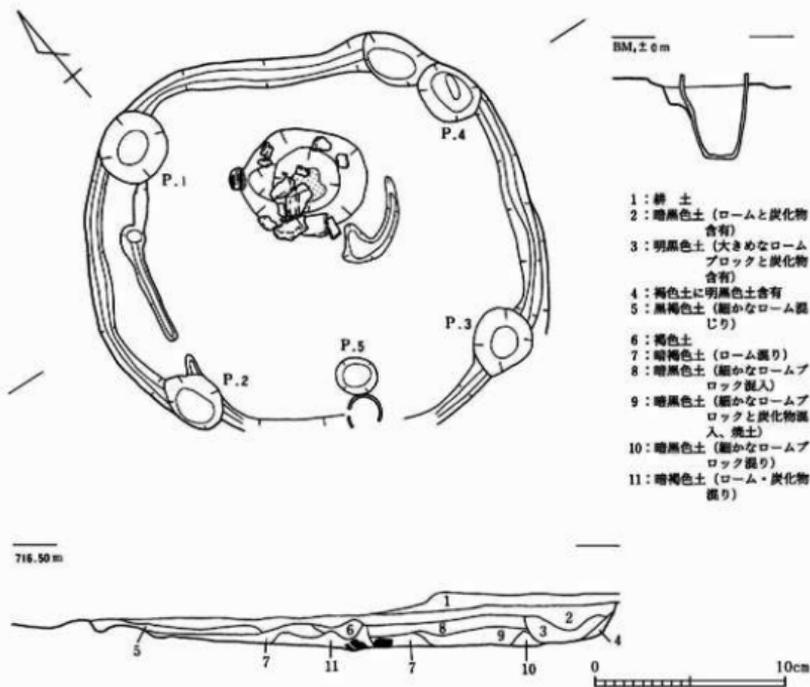
また、壁直下の周溝の内側には、西部についてはP.1とP.2の間に周溝と思われる溝が掘られており、P.5内からは加曾利E系の深鉢(第5図2)が潰れた状態で出土していることから、この住居址は拡張された可能性がある。しかし、拡張以前の柱穴については明確にする事ができなかった。炉の石はほとんど抜き取られたと考えられ、形態をとどめていない。しかし、炉の底部には焼土が出土している。

埋甕はいわゆるタル形をしたものと思われ、底部から胴部まではほぼ完全に残っていたが、口縁部の部分はきれいに切り取られていた。また、蓋石は出土していない。

P.5より出土した深鉢は、やや小振りで口縁部はほぼ完全に残っていたが、底部付近の欠損



第5図 第1号住居址出土遺物(1)



第6図 第1号住居址実測図

部分が多い。

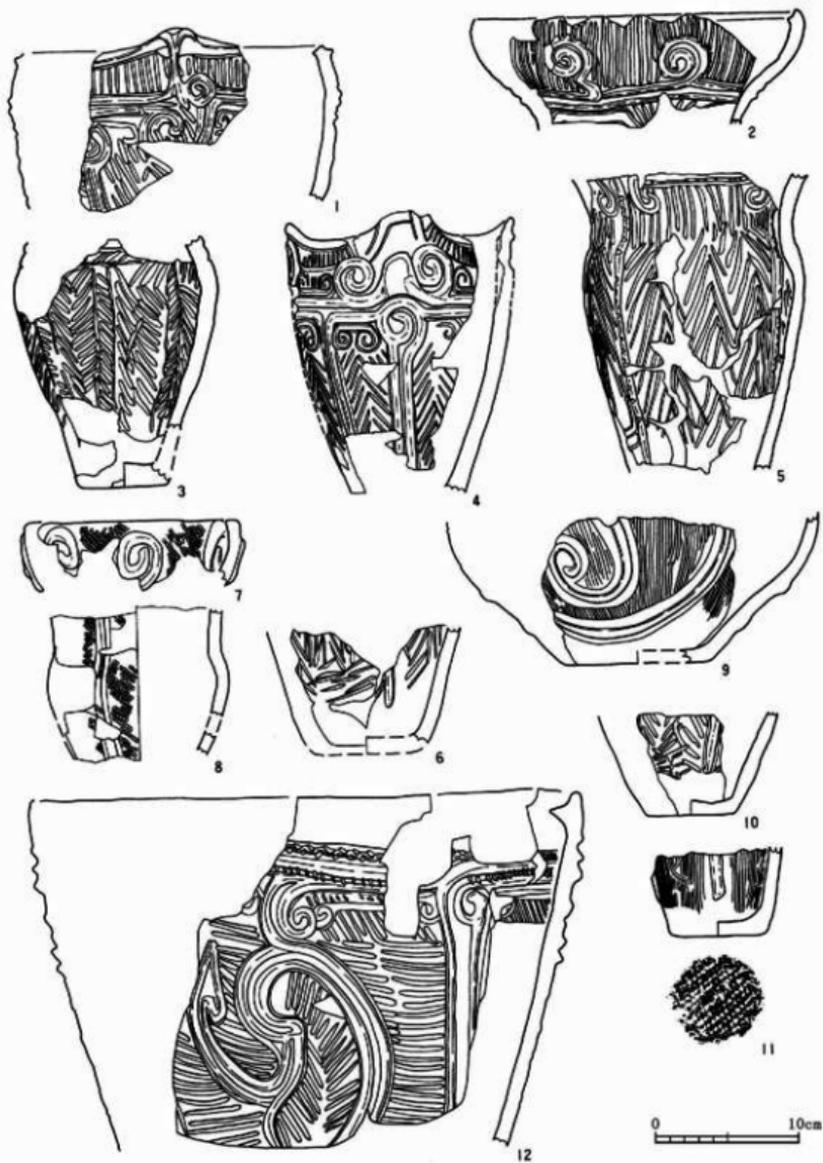
床はほとんど全面にわたって硬く踏み固められている状態が観察されている。

遺物(第5図・第7図～第12図・第65図1)

出土した遺物はほとんどが唐草文系の土器で、一部加曾利E系が含まれている。

まず、唐草文系の土器では、細い縦の条線文状の沈線を地文とし、その後に沈線で懸垂文・腕骨文を引くもの(第8図6・7・9～12・14)や、隆線によって腕骨文や懸垂文等を施文するもの(第7図11・第8図16・第9図5・第10図10～13)があげられる。

次に、まず隆線によって唐草文や渦巻状の模様等を施文し、その後にヘラ状工具によって隆線に対して放射状または稜杉文状に沈線を施文するもの(第5図1・第7図1・2・4～6・10・12第8図1・5・23～26・第9図・第11図1～9)があり、この土器の出土量が最も多い。また沈線によって唐草文や渦巻状の模様等を施し、その後にヘラ状工具によって隆線に対して放射状



第7图 第1号住居址出土遺物(2)

または綾杉文状に沈線を施文するもの（第8図17～19・21・22）の2系統がある。

以上のほかに、加曾利E式系統の土器が出土している（第5図2・第7図7・8・第8図8・第10図14～21）。

細い条線文を地文とする系統はすべてが破片で出土している。このうち、ヘラ状工具によって沈線文を施文するものは、蛇行した懸垂文を施文しているもの（第8図10・11・14）や直線の懸垂文を施文しているもの（第8図6・15）、腕骨文を施文しているもの（第8図7）、唐草文が施されているもの（第8図9・12）がある。隆線によって施文しているものは、直線的に貼り付けられた懸垂文をもつもの（第7図11・第10図10・11）や唐草文を作りだしていると思われる破片（第7図9・第10図12・13）、腕骨文を施文しているもの（第8図16）に分類される。また、第7図9は1条の隆線によって渦巻き文を構成している土器である。11は深鉢の底部と思われ、縦位の条線文を地文として、直線的な隆線による懸垂文を4単位張り付け、その中間に沈線による蛇行した懸垂文が施されている。なお、底部は網代底となっている。その他、第8図16については、腕骨文の隣に蛇行する懸垂文がみられ、分類した中にも文様の組み合わせがあることは十分に考えられる。

また、この系統に共通する点として、細い条線文を先に施文してから様々な文様を施文している。

つぎに、隆線による施文を行った後に、ヘラ状工具による沈線によって斜位または綾杉状の文様を間に充填している土器であるが、この系統は、唐草文を施文しているもの（第5図1・第7図12・第9図1・6～12・16・24・第10図1・3～6・8）、直線の懸垂文を付したもの（第8図21・25・26・第9図17・21）、腕骨文を貼り付けたもの（第9図20・21）がある。

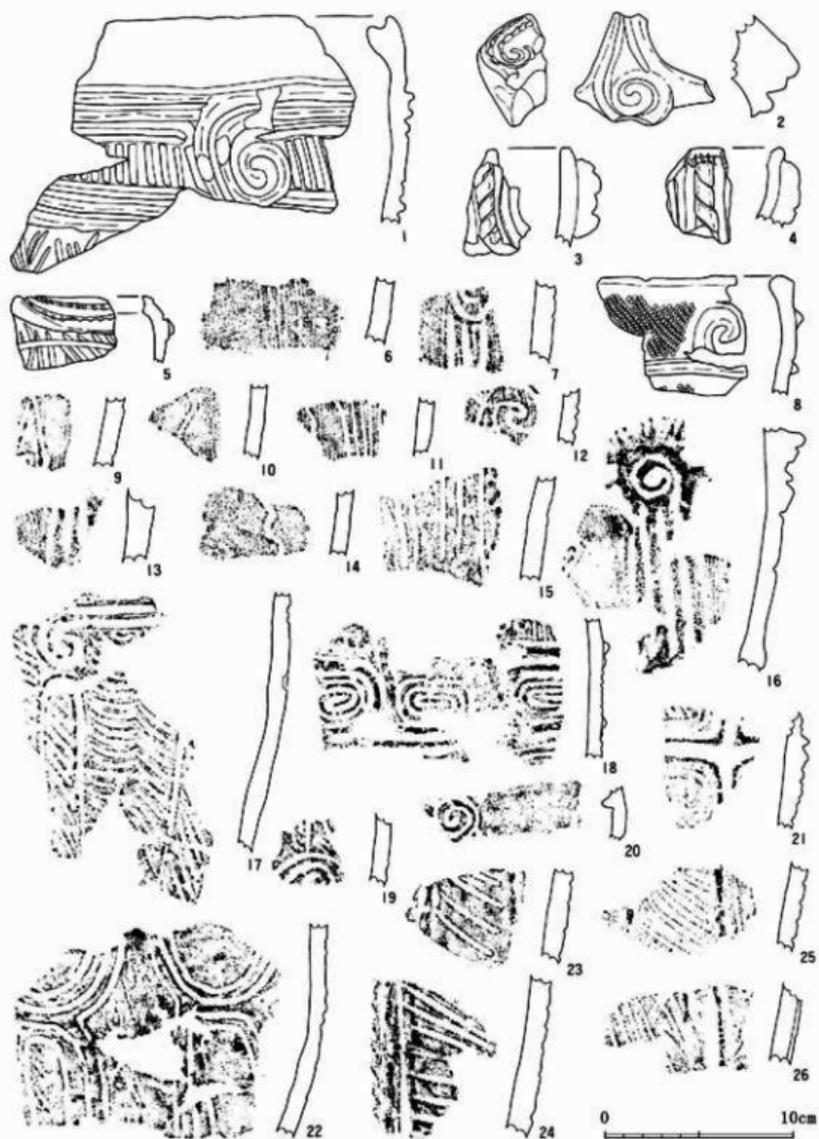
また、口縁部をみると、縦位のヘラ状工具による沈線文を施文しているもの（第7図1・2・4・第8図5）、横長の楕円に区画された隆線の中に、渦巻文や交互刺突文を充填しているもの（第9図1）、無文帯をもつもの（第7図12・第8図1・第9図2）に分類され、縦位のヘラ状工具による沈線文を施文しているものの中には4単位の把手状の突起が作られているもの（第7図1・4）がある。

また口縁部と体部を区画する横位の隆線の下部にヘラ状工具によって渦巻文を伴う横位の沈線を施文している場合もある（第9図6・17）。

その外に加曾利E系の土器は、口縁部は渦巻文が施文され（第5図2・第10図14）底部は縄文を地文として、直線的な懸垂文や蛇行した懸垂文を沈線で表現している。

これらの遺物から、特に唐草文系の土器に、唐草の文様が明確に認められ、いわゆるタル形が多い点などをみると唐草文系の中頃の時期と位置づけられる。

また、黒曜石製の石鏃をはじめして、磨製石斧や磨石等の石器も多数出土している。（第11図・第12図・第65図1）



第8图 第1号住居址出土遺物(3)



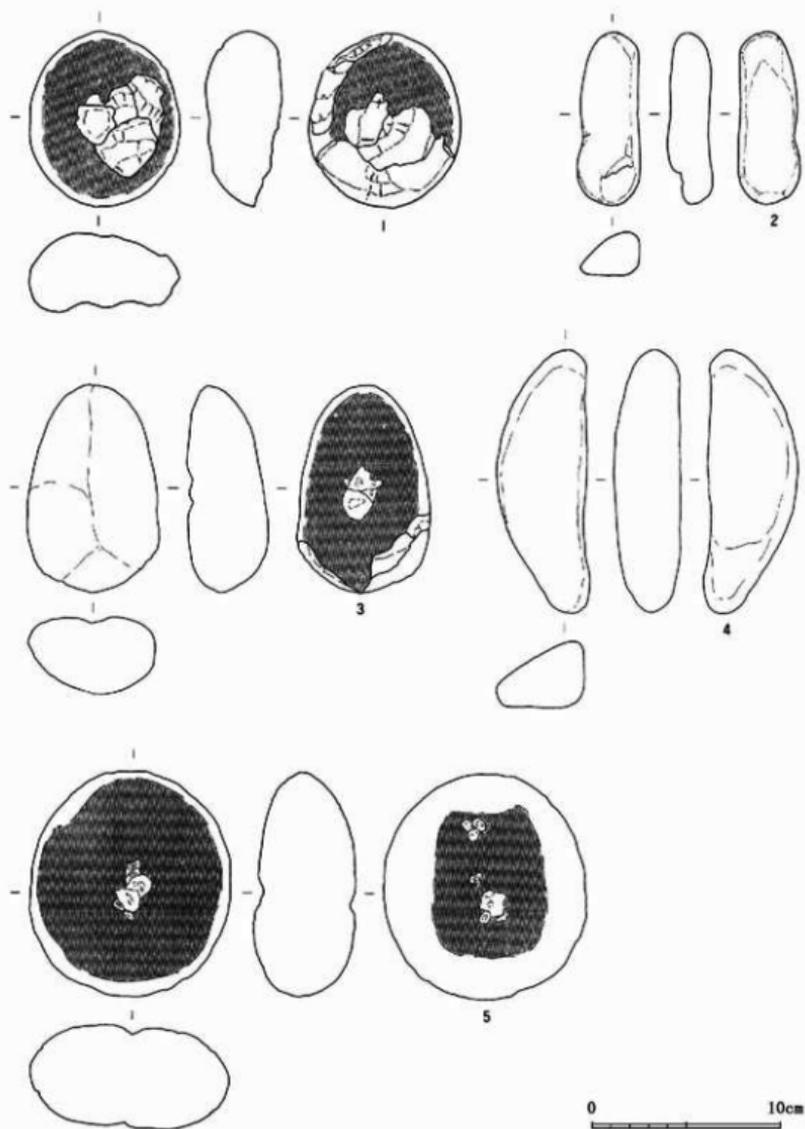
第9图 第1号住居址出土遺物(4)



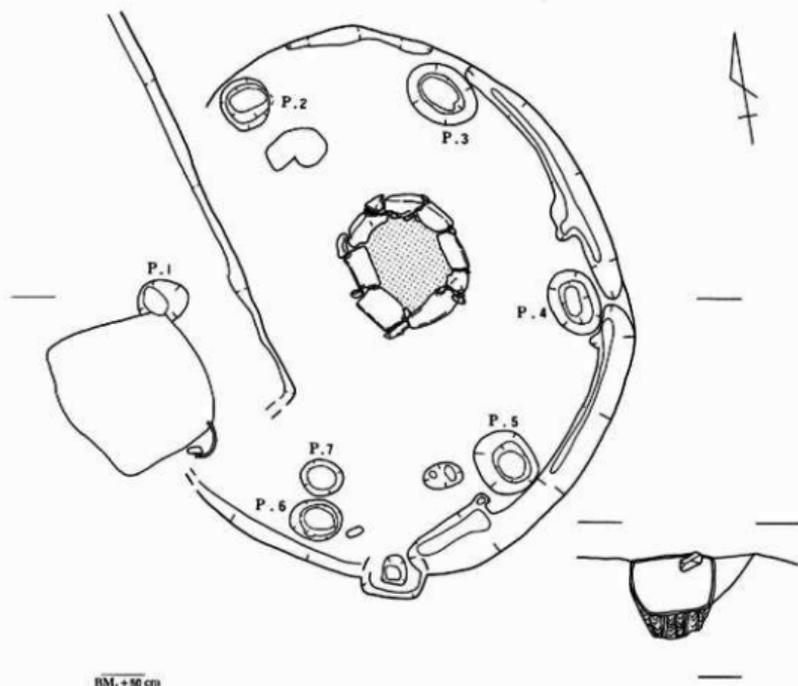
第10图 第1号住居址出土遺物(5)



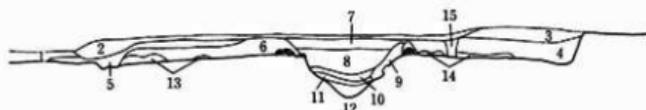
第 11 图 第 1 号住居址出土遺物 (6)



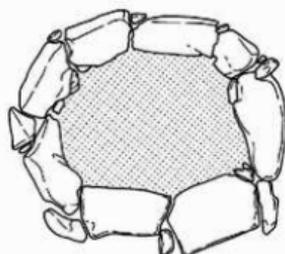
第 12 图 第 1 号住居址出土遺物 (7)



BM, +50 cm



- 1: 暗褐色土と細かいローム混り
- 2: 明黒色土 (細かいローム、炭化物、わずかな炭化物混り、硬い)
- 3: 暗黒色土 (炭化物混り)
- 4: 暗黒色土 (炭化物、ローム混り、3より多い)
- 5: 黒褐色土 (わずかな炭化物含む、この層にて住居址ブタ土をカクラン中世時か浅い溝をもつ)
- 6: 暗黒色土 (ローム、炭化物わずかな混入)
- 7: 暗褐色土 (わずかな炭化物、ローム混入、8よりしまっている)
- 8: 暗黒色土 (7より大きめの炭化物、ローム混入)
- 9: 明黒色土 (ローム混り)
- 10: 明黒色土 (9より細かいローム混り、炭化物含む)
- 11: 茶褐色土 (焼土混り)
- 12: 赤色土 (焼土)
- 13: 褐色土
- 14: 明褐色土 (ローム混り)
- 15: 中世時のカクラン



0 2 m

第13図 第2号住居址実測図

第2号住居址

この住居址は、第1号住居址の北西に位置し、西部は中世の遺構によって破壊されている。主柱穴はP.1（深さ49cm）、P.2（46cm）、P.3（58cm）、P.4（61cm）、P.5（55cm）、P.6（38cm）、と思われる。住居址の規模は東西約5m、南北約6mの楕円形を呈している。埋甕は南西の壁にあったが、中世の方形竪穴によって体部上部が一部破壊されており、この竪穴内より同一個体の破片が少量ではあるが出土した。また、埋甕の底付近より、別個体と思われる深鉢の底部（第16図2）が正位に置かれていた。なお蓋石は出土していない。

この住居址の炉は中央よりやや奥まった位置に、完全な形で出土しており、炉内は焼土が厚く堆積している状況が確認されている。炉は長辺1.5m、短辺1.2mで、埋甕の埋設された住居址の主軸と考えられる方向がやや短い楕円形のもので、埋甕側の2個の炉石は平らに敷かれ、残りのものは立てて設置されている。これらの石もよく熱を受けており、下半については赤色化している状況であった。また、大きな炉石の間に埋めるようにして小さな石が詰められている状態が確認された。

遺物（第14図～第16図）

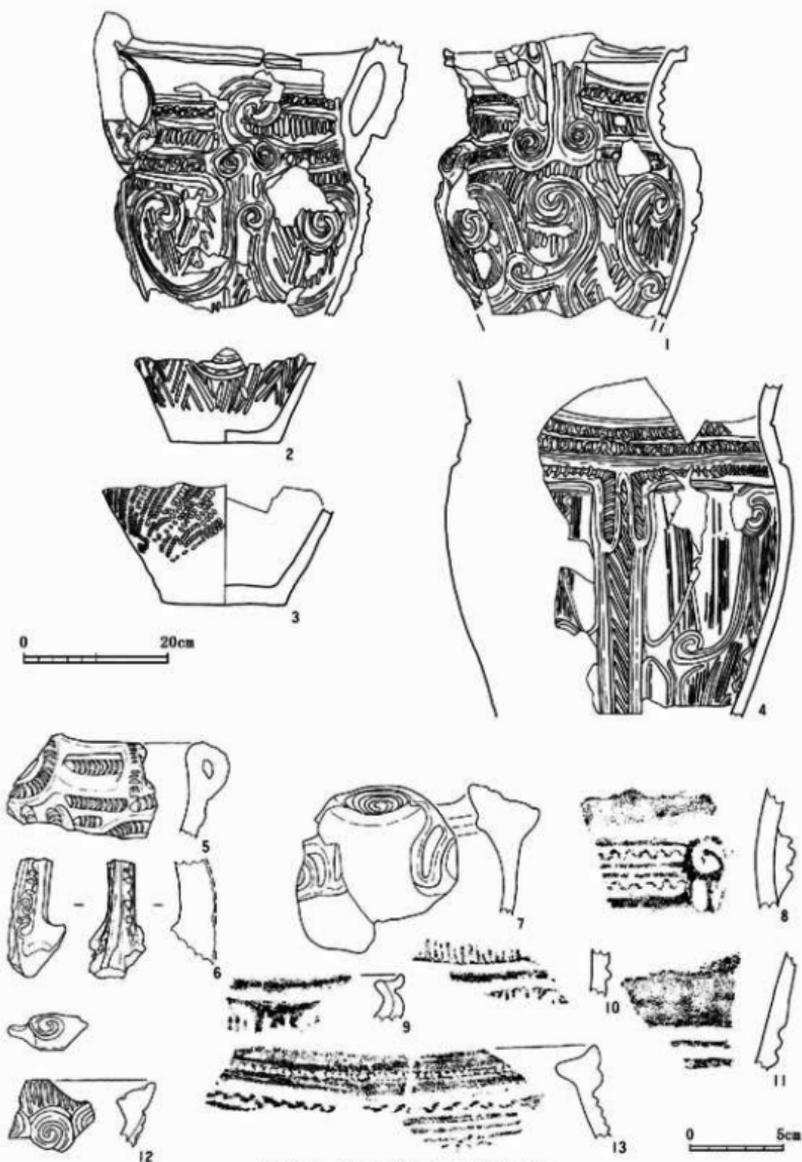
出土土器はやはり第1号住居址と同様に、大きく3系統に分類できる。

まず、細い縦の条線文によって施文された後に、ヘラ状工具によって沈線を施文しているものは、蛇行する沈線を引いたもの（第15図1・11）があり、第16図1についてはこの文様が頻繁に使用されている。また、唐草文を施しているもの（第15図2・3）や、腕骨文（第15図5）もみられる。その他、第16図4は、体部上部に2段の交互刺突文が施され、その下部の隆線の間と、縦位の隆線の懸垂文との間を、ヘラ状工具をもちいて斜位の沈線を充填し、その他の体部については細い縦位の条線文を施文したのちに沈線による渦巻文や、唐草文状の文様を引いている。口縁部は無文と思われる。

つぎに、隆帯によって渦巻文や、唐草文を施文したのちにヘラ状工具による綾杉文を施文しているもの（第14図1・2・4・第15図13～22・第16図）があげられる。

第16図は埋甕で、口縁部と底部は欠損しているが、体部と口縁部は横位の隆線によって区画されており、その下部に狭い横位の文様帯をはさんで、体部の文様帯へと続いている。文様は縦に4分されており、その区画のために、縦位の隆線による腕骨文と懸垂文の組み合わせがもちいられている。区画された4単位には、上半部に唐草文が対照的に施され、その唐草文から下に向かって渦巻文を始まりとする懸垂文が貼り付けられている。綾杉文は小さな単位で密に描かれている。

第14図1は2個の把手を持つものである。把手との間には、縦位に区画する隆線を施文している。また、ヘラ状工具による沈線は、埋甕に使用されていた深鉢と比べてやや粗雑な施文をしている。その他加曾利E系の土器も体部下半部の破片が出土している（第15図20・23～26）。



第 14 图 第 2 号住居址出土遺物 (1)



第 15 图 第 2 号住居址出土遺物 (2)

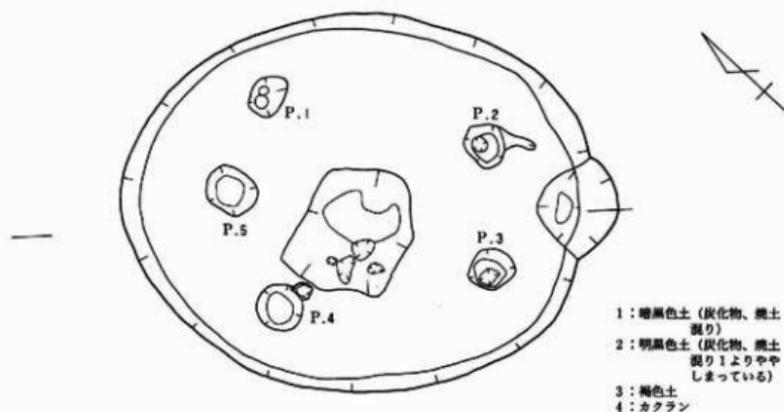


0 20cm

第16図 第2号住居址出土遺物(3)

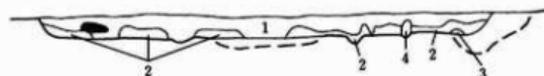
第3号住居址

この住居址は、BL-21より出土している。プランは長径5m、短径4mの楕円形を呈しており、柱穴はP.1(深さ64cm)、P.2(58cm)、P.3(61cm)、P.4(53cm)、P.5(49cm)である。また中央部に炉が構えられていたと思われるが、炉石等は抜き取られていて出土していない。また、床は比較的軟らかかった。また、南東壁には45cm×80cmの土坑が検出されているがこの住居址に伴うかは不明である。



- 1: 暗黒色土(炭化物、焼土混り)
- 2: 明黒色土(炭化物、焼土混り1よりややしまっている)
- 3: 褐色土
- 4: カクラン

BM+10cm



0 2m

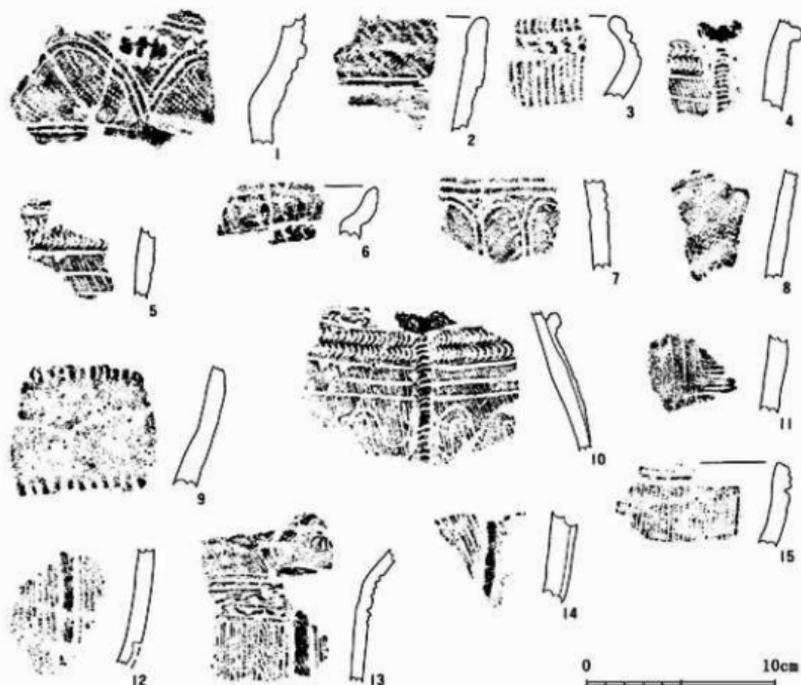
第17図 第3号住居址実測図

遺物 (第18図・第53図1)

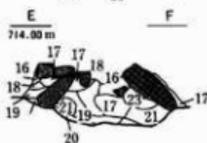
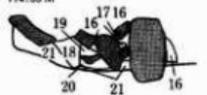
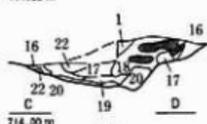
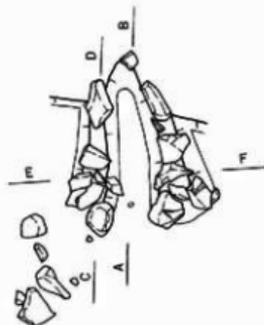
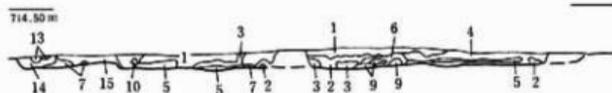
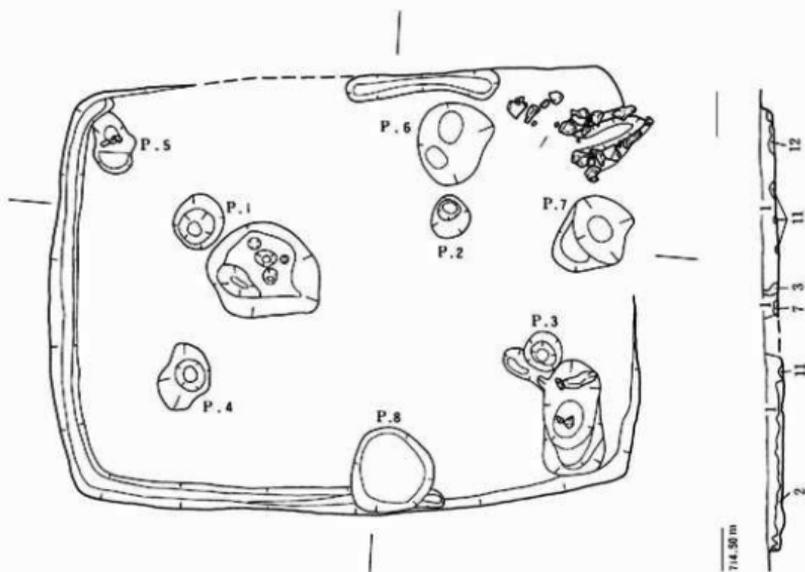
この住居址から遺物の出土は非常に少なく器形の判明する土器は出土していない。

出土した遺物のうち、第18図3～5・10～15はへら状工具による縦位の沈線文を施し、その模様を区画するように半截竹管状工具による押引文を施文している。3～5・11・13・15は口縁部が内弯するように閉き、体部は直線的に立ち上がる形態と思われ、10・12・14はいわゆるタル形を呈するものと思われる。特に、10は縦位の細条線文を施文したのちにへら状工具によって体部に渦巻き文を施文しており、唐草文の承踏へとつながる様子を示している。14は綾杉文を施していると思われる。以上のことから、これらは縄文時代中期末葉の早い時期の土器と思われる。また、第18図1・2・5～9は中期初頭の梨久保式と思われる。したがって2時期の遺物が混在しており、しかもいずれも破片であることから、この住居址に伴う遺物として取り扱うことには疑問ものこる。

また、床直上より、剥片を利用した黒曜石が1点出土している (第53図1)。



第18図 第3号住居址出土遺物



- 1: 黒褐色土 (かたい)
- 2: 黒褐色土 (やわらかい)
- 3: 黒色土
- 4: 黒色土 (やわらかい)
- 5: 褐色土 (ローム粒混る)
- 6: 黒色土 (焼土混る)
- 7: 褐色土
- 8: 褐色土 (かたい)
- 9: 焼土
- 10: 褐色土 (ローム混る)
- 11: 褐色土 (やわらかい)
- 12: 褐色土 (黒色土混り、やわらかい)
- 13: 黒褐色土
- 14: 黒褐色土 (ローム粒混る)
- 15: ローム
- 16: 黒褐色土 (黄色粒混る)
- 17: 黒褐色土 (ローム粒混る)
- 18: 黒褐色土 (焼土粒多めに混る)
- 19: 焼土 (黒色土や中混る)
- 20: 暗黄褐色土 (焼土やや混る)
- 21: 暗褐色土 (焼土粒やや混る)
- 22: 暗黄褐色土 (黒色土や中混る)
- 23: 暗褐色土 (焼土粒、21より少なめに混り、黄色小粒も混入)



第19図 第4号住居址実測図

第4号住居址

C T-60より検出された住居址で、南北6.2m、東西4.5mの長方形を呈している。壁高は、およそ15cmほどで、P. 1（深さ51cm）、P. 2（52cm）、P. 3（45cm）、P. 4（39cm）が主柱穴と考えられる。また、北壁を除いた3方に周溝が巡らされ、カマドは北東隅に築かれており、石組カマドであった。カマドの裾部の一番手前には、高さ30cm程の大きな石を縦にたてて固定し、そこから煙道方向にむかって比較的小さい石を並べている構造であった。

カマド周辺には、貯蔵穴かと思われる土坑が2か所（P. 6、P. 7）発掘されている。

床はそれほどしまっている様子は確認できなかった。

また、住居址中央部付近には縄文時代の土坑が検出されており、縄文時代中期の深鉢の体部が出土している。

遺物（第20図・第67図1・2）

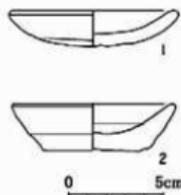
この住居址から出土した遺物は非常に少量であった。第21図1は土師器皿である。丸底の小型のもので粗雑な作りである。2は土師器坏である。非常に小型化が進んでおり、器壁も厚く、やはり粗雑な作りである。また、この住居址からは鉄製紡錘車のはずみ車が2個凹部を重ね合わせた状態で出土している（第57図1・2）。

以上のことから、この住居址は平安時代の末期に位置づけられると思われる。

第5号住居址

C A-40より検出されており、北西部は試掘時に一部破壊してしまっている。

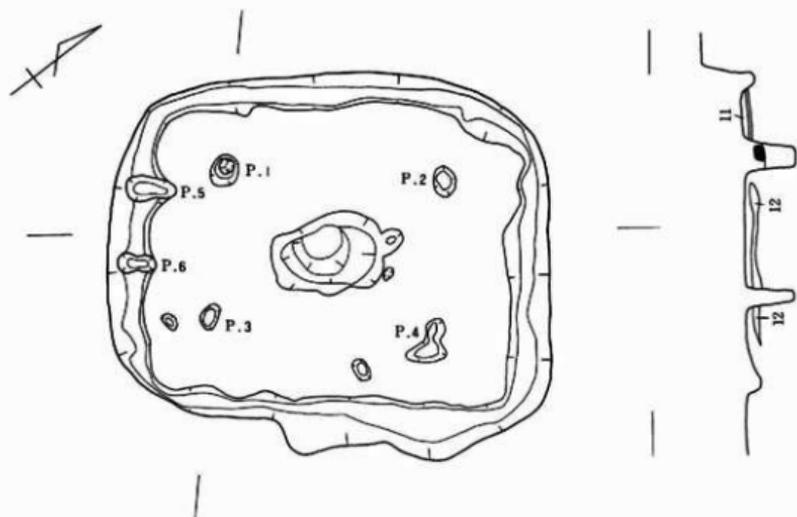
長径4.5m、短径3.5mの長方形の竪穴住居址である。中央部に窪み状の土坑があり、ここが炉と推定される。柱穴はP. 1（深さ50cm）、P. 2（51cm）、P. 3（51cm）、P. 4（54cm）と思われ直径およそ30cm程で比較的小さいものである。固くしまった床面はローム層まで掘り込まれているが、この床下から、黒色土が出土していることから、一度掘り込んで貼床をしていると考えられる。P. 5、P. 6は南壁直下に楕円形に掘られており出入口に関係する施設があったと思われる。周溝は四方に巡らされている。壁高は東側で30cm、西側で49cmであった。



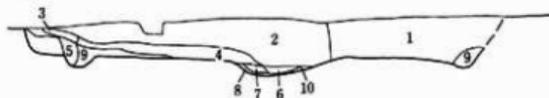
第20図 第5号住居址実測図

遺物

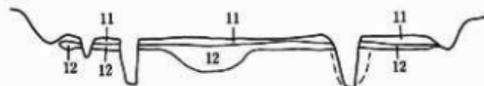
この住居址からは遺物の出土はなく、時期を明確にすることはできなかった。



BM₄+20 cm



BM₄+20 cm



- 1: カクラン
- 2: 黒褐色土 (褐色のブロック混り、小石混る)
- 3: 明褐色土 (硬い)
- 4: 黒褐色土 (小石混り、粘性あり)
- 5: 暗褐色土 (やわらかい)
- 6: 灰、炭化物層
- 7: 炭化物層
- 8: 黄土
- 9: 暗褐色土 (褐色土ブロック混入多)
- 10: 褐色土
- 11: ローム粘床 (たたき床)
- 12: 黒土

0 2 m

第21図 土坑実測図(1)

第2節 土 坑

今回の調査においては、土坑で番号をつけたものは163基出土しているため、全てを図示することができなかった。そのため、遺物の出土している土坑、および中世の方形竪穴および墓壇と思われるものを主として図示した。その他の土坑については全体測量図に図示しているが、ページの都合上、一覧表等は作成していない。

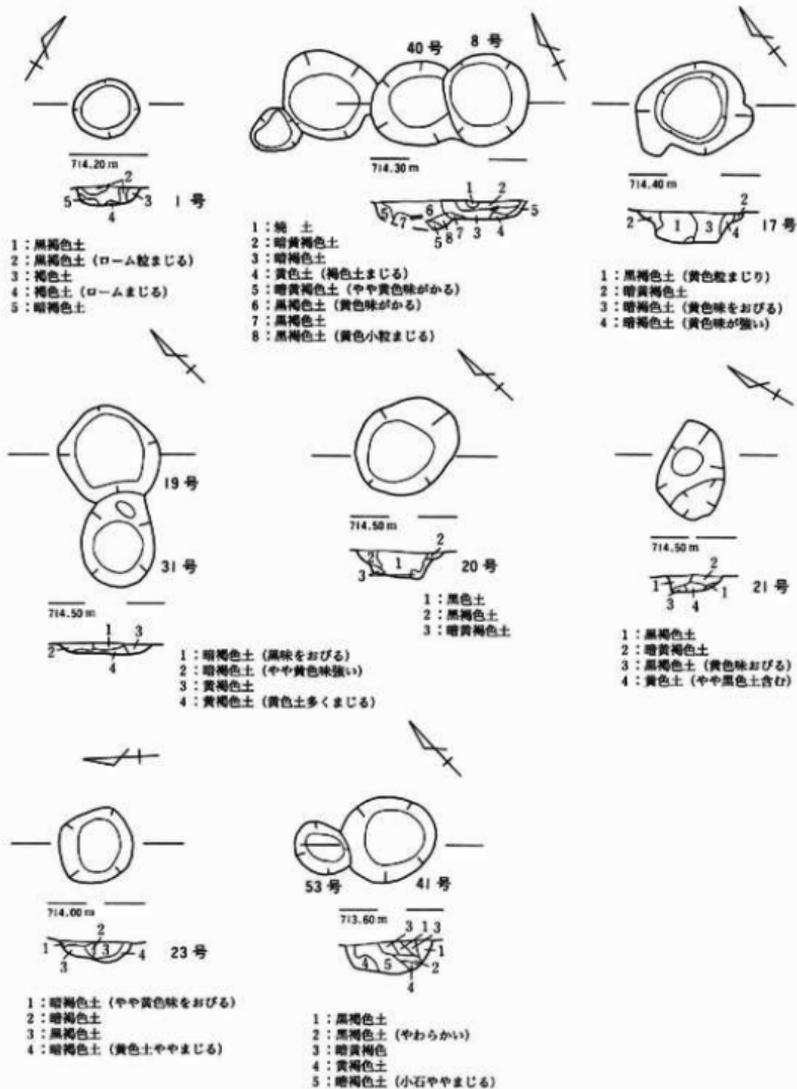
第21図～第23図6は縄文時代と思われる土坑であるが、ほとんどの土坑で出土した遺物は破片であり、しかも覆土中より出土しているものなので遺構に伴うものかは疑問が残る。したがって縄文時代の土坑としたものの中にも時代が異なるものが存在する可能性がある。

以上の前提にたって出土している土器より土坑をみると、大きく4時期に分かれている。

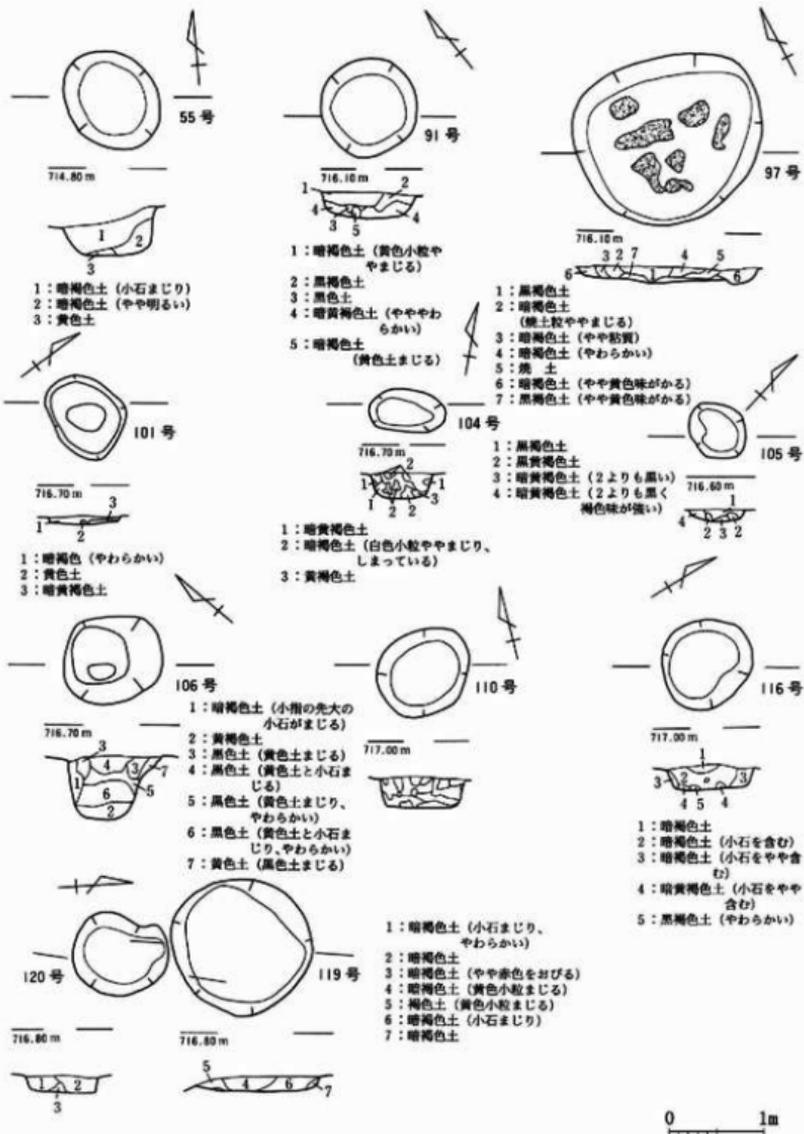
まず、縄文時代前期であるが、第31・63号土坑があげられる。第31・63号土坑はともに第I調査区より検出されている。第31号土坑は第19号土坑と切りあって出土しており、長径1m、短径0.8mの楕円形で、深さ約10cmであった。第63号土坑は、第4号住居址東側のサブトレンチ内より出土し、断面皿状になっている土坑である。これらの土器は半截竹管状工具によるレンズ状文を施文しているものがほとんどである。この土器は他の土器よりやや古い時期と考えられるが、おおむね前期末葉といえる。

つぎに、縄文時代中期初頭であるが、これは第1・2・19・40・17・19・20・21・33・35・45・64・96・113・116号土坑がある。これらのほとんどは、上部が削平されていて皿状の断面となっている。第1号土坑は、直径0.7mの円形で、15cmの深さである。第2号土坑は直径1m、深さ1m程で、土坑上層からは中期初頭の深鉢が伏せられた状態で出土している(第36図17・図版16-5)。第19号土坑は、直径1.1mの円形で、出土した土器は、体部上半から口縁部下部の破片であり、横位の平行沈線文を2条施文して区画とし、その間を縦位または格子目状の集合沈線文によって充填している。この土器は、頸部のくびれた器形をしておろくびれた部分には隆帯を貼り付け、その上に爪形文を施文し、区画文としている。また、その上部の口縁部は、縦位の沈線文が施文され、隆帯による文様が4単位貼り付けられている。体部は上部に平行沈線によるY字文が描かれ、その下部には結節縄文が充填されている。第33号土坑は、直径0.7mの円形で、深さおよそ5cmであった。第35号土坑は長径0.9m、短径0.6mの楕円形で、深さ約5cmと浅い土坑である。第45号土坑は、直径0.5mと小さな土坑で、深さは約20cmであった。第96号土坑は直径1.3mの円形で、深さ20cmであった。

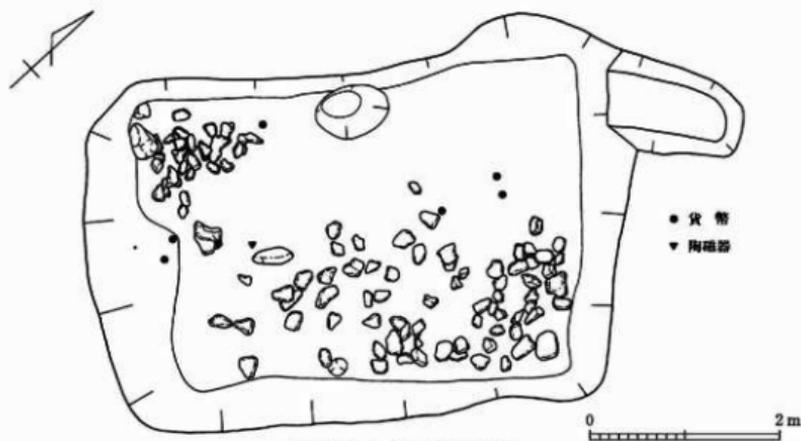
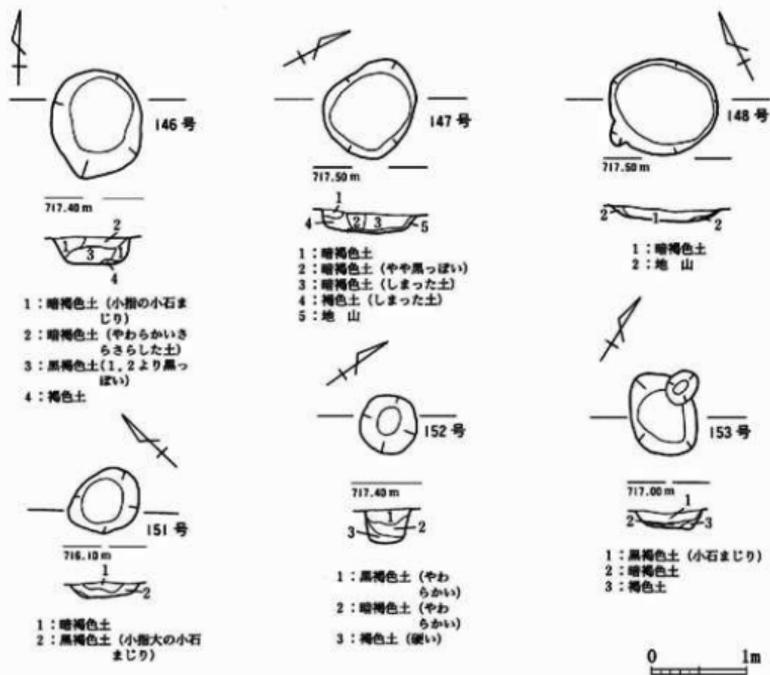
縄文時代中期中葉のものは、第6・38・54・57・97・139・155号土坑があげられる。いずれのものも、ほとんどが区画文の系統に属する土器と思われるが、破片であるため明確にすることはできない。第6号土坑は、直径0.9mの不正円形で、深さ25cmであった。第38号土坑は、直径0.5mの円形で、深さも4cm程度と非常に浅い土坑である。第139号土坑は、直径1.3mの円形であるが、周囲に多くのピットが掘り込まれて、重複している。また、第139号土坑からは浅鉢も出土している(第36図9)。



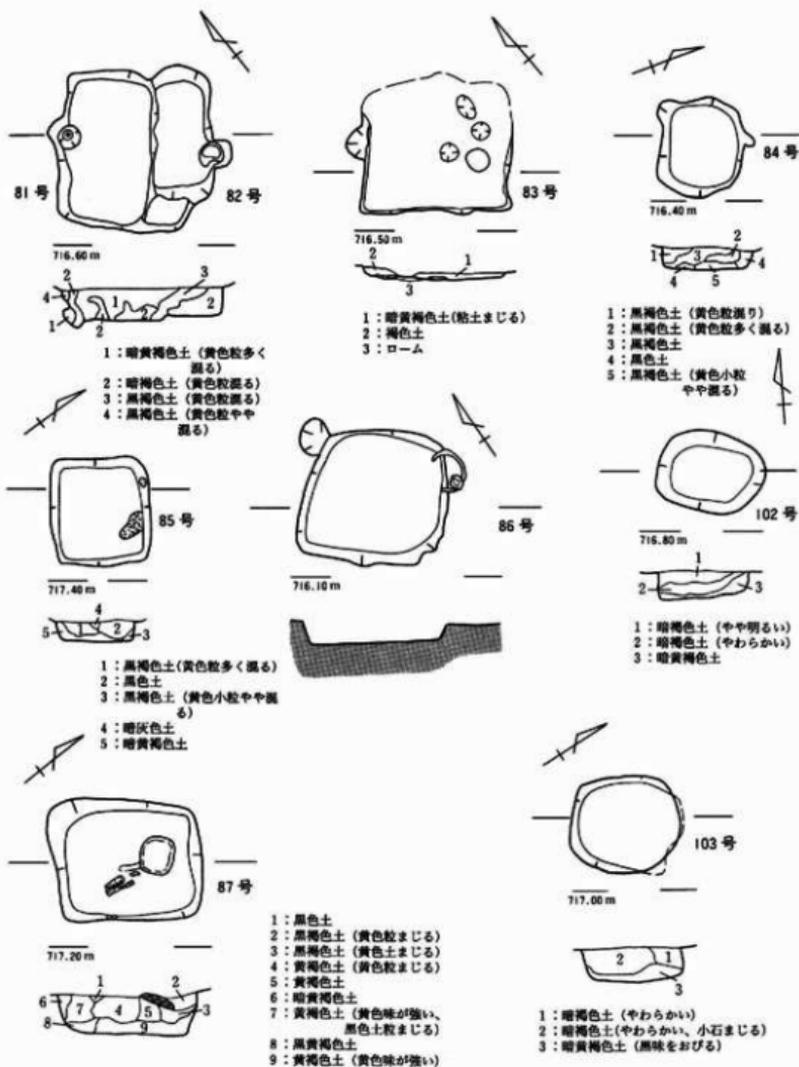
第22図 土坑実測図(1)



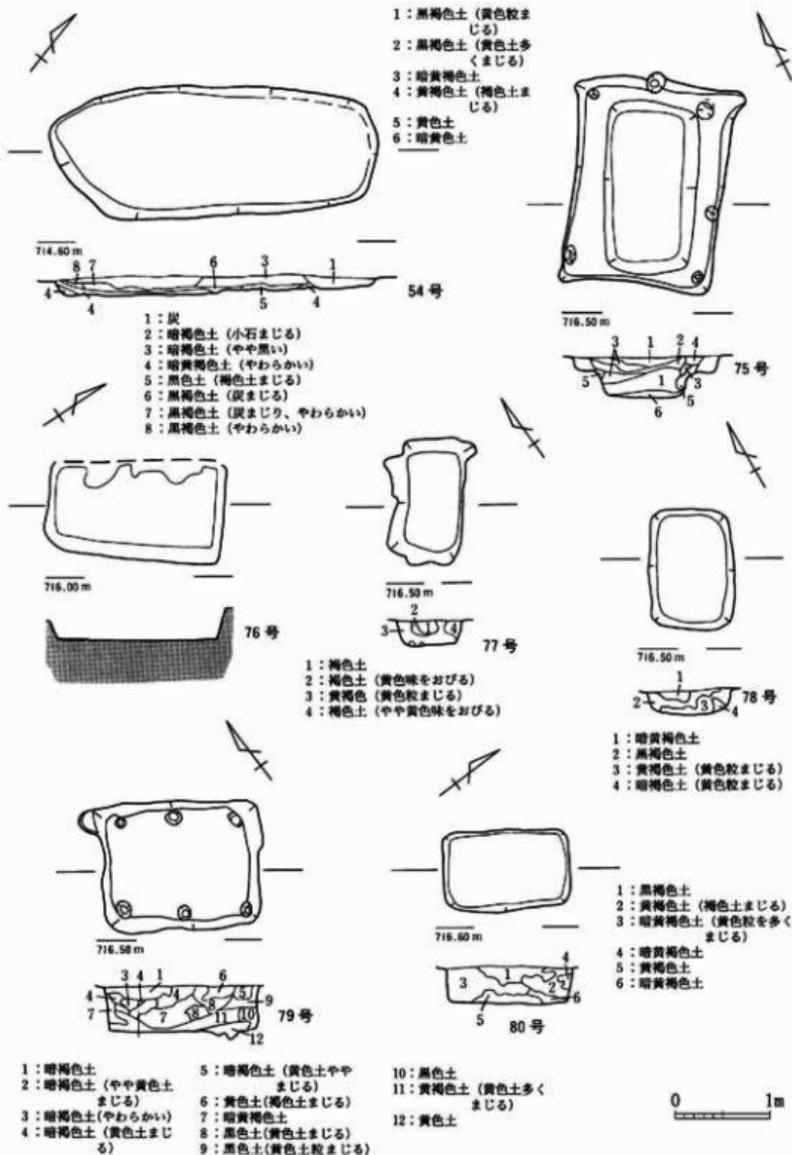
第23図 土坑実測図(2)



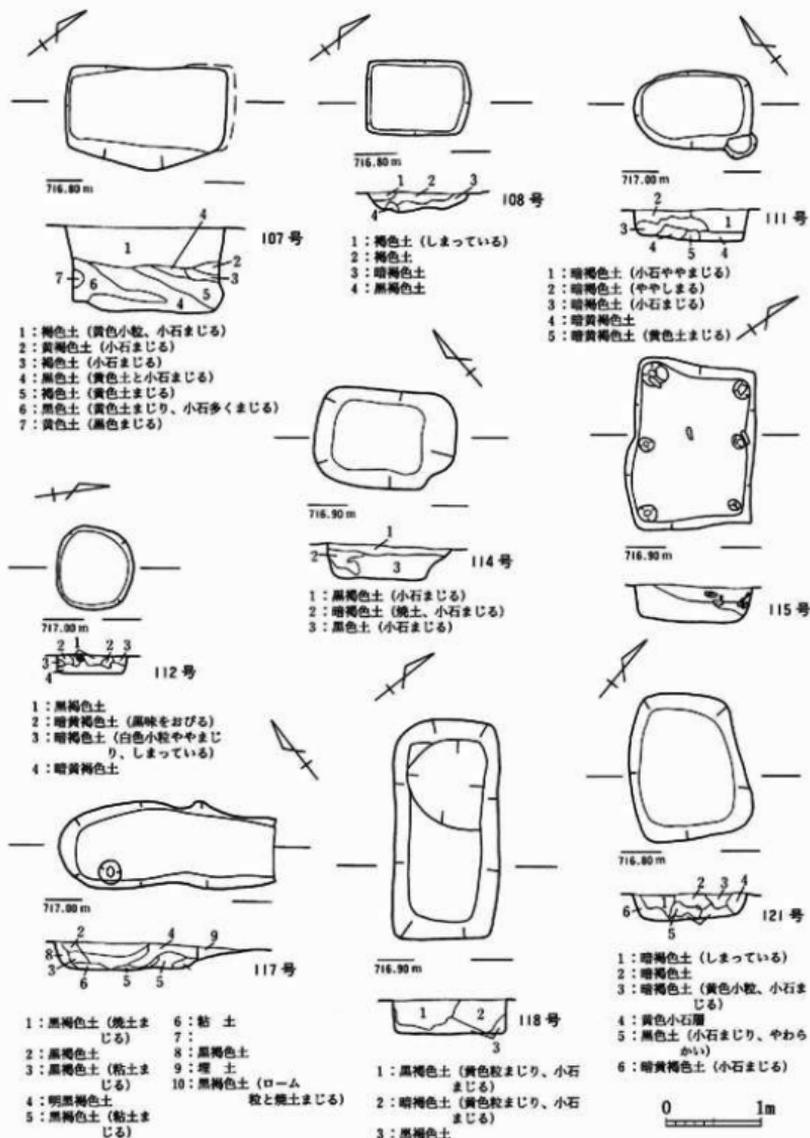
第24図 土坑実測図(3)



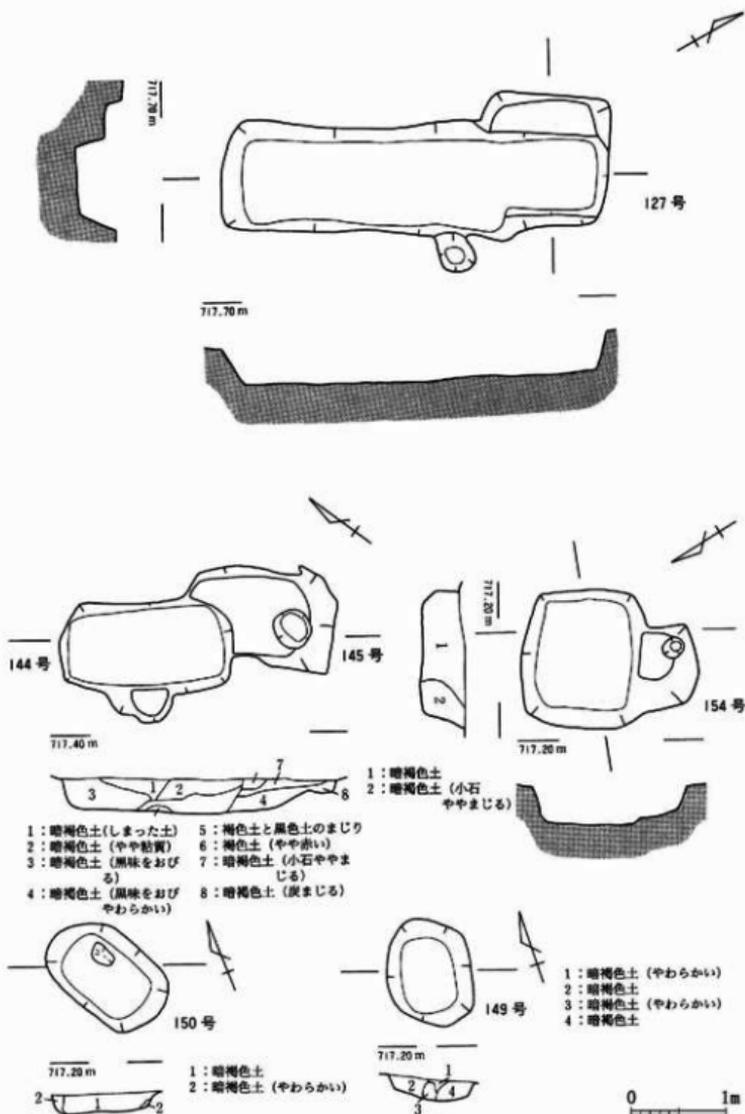
第25図 土坑実測図(4)



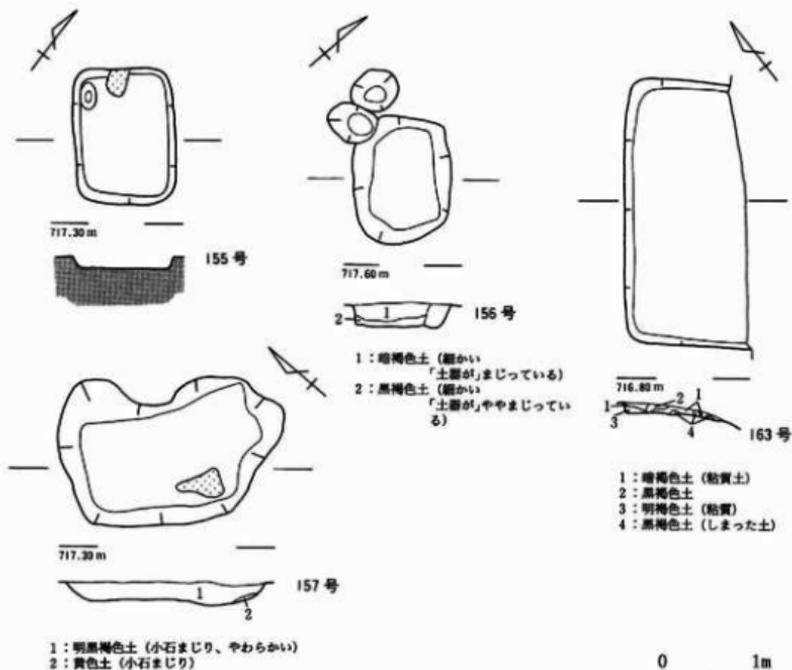
第26図 土坑実測図(5)



第27図 土坑実測図(6)



第28図 土坑実測図(7)



第29図 土坑実測図(8)

その他、第137号土坑は、直径0.7m、深さ約20cmの浅い皿状の土坑にもかかわらず、浅鉢の破片が多量に出土しており2個体が器形の判明する程度に接合できた(第32図1・2)。1は口縁部が平口縁で、内面に爪形文が口縁部に平行になる形で施文されており、2は4単位の波状口縁と思われる。この浅鉢の内面の文様は、口縁部の波頂部付近で、爪形文による渦巻文を施しており、波頂部の間は口縁に沿って爪形文が施文されている。

また、第33図は、平安時代の住居址の床に破壊されて検出された第57号土坑より出土した体部である。体部上部の一部と口縁部は欠損している。体部は全面に縄文が施されている。

縄文時代中期末様の土坑は、第8号土坑があげられる。この土坑は、直径約1mほどの円形で深さ20cmの、断面皿状の土坑であり、第40号土坑を切って掘られている。

第24図7～第31図は中世と思われる方形の土坑である。

これらの土坑はいわゆる居館址に伴う方形竅穴といわれるものと、墓壇とに分類できる。

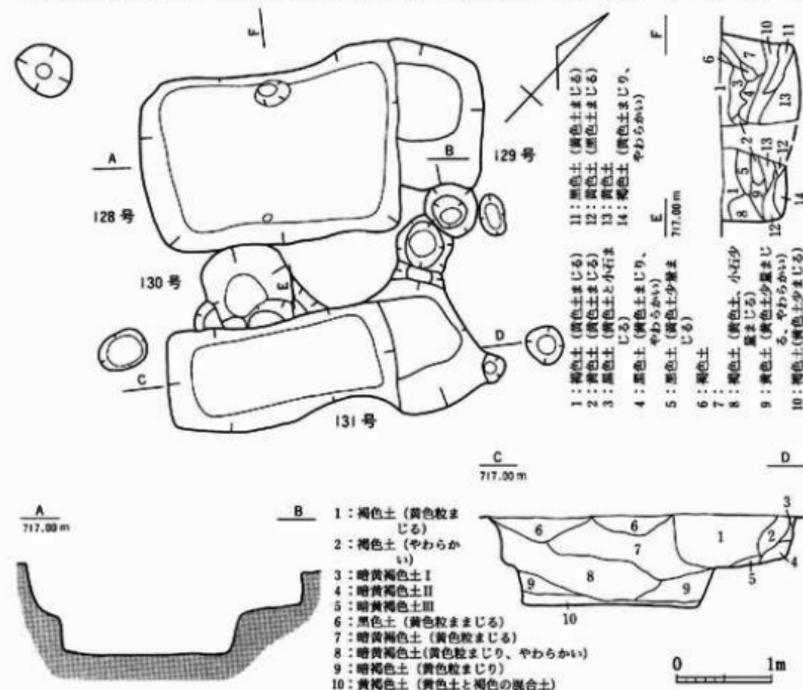
方形竪穴は、主として掘立柱建物址が検出されている区域に限られ、堀によって区画された区域の東側に墓塚は多い。

方形竪穴は第81～83・86・75～80・107・108・111・114・115号土坑があげられる。

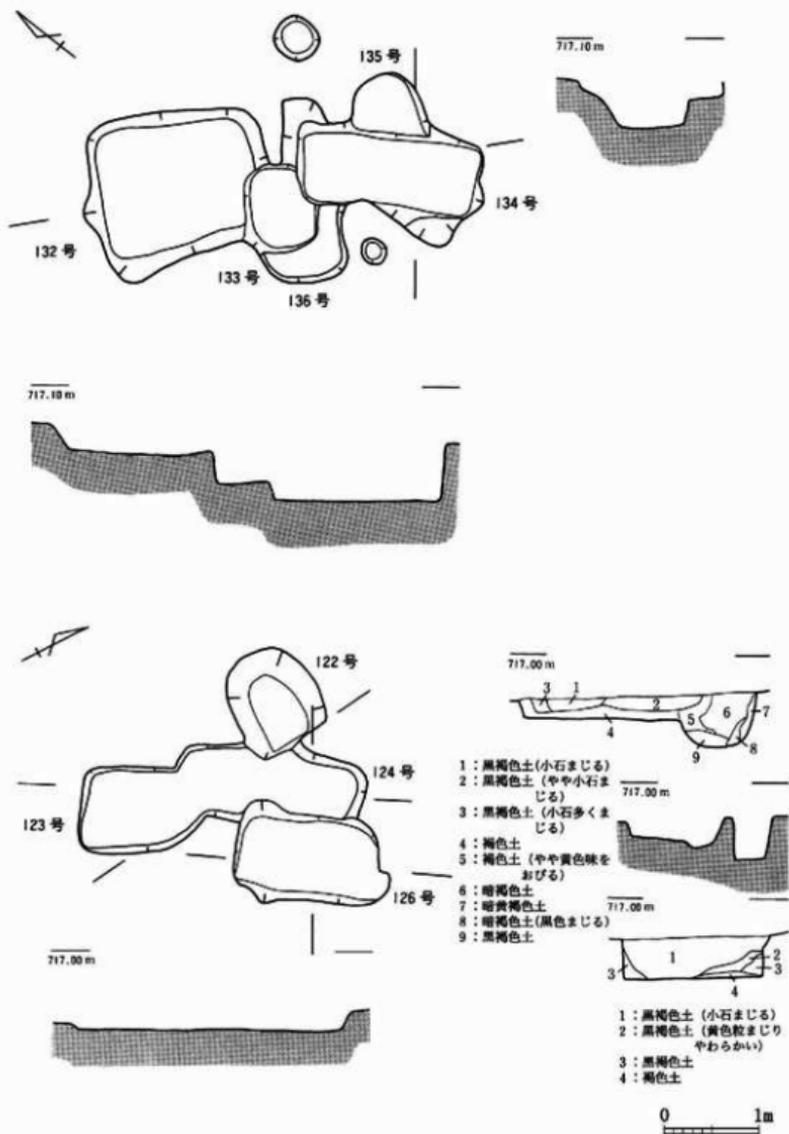
墓塚とおもわれる土坑は、第84・85・87・117～119・121～124・126～128・131～136・144・145・154・150・149・155・156・157である。また、円形ではあるが、竪穴とおもわれるものがあり、第102・103・112号土坑がそれに該当すると思われる。

方形竪穴は、竪穴内に柱穴と思われるビットが出土しているものと、柱穴らしいものが検出されなかったものにと大きく分類される。今回の調査においては後者のほうが多数を占めている。まず、竪穴内のビットを伴うものであるが、第75号・第79号・第115号が該当し、いずれも壁周辺に6か所ビットが検出されている。第75号方形竪穴は、ビットの検出された浅い方形竪穴が埋没した後に再びビットを伴わない方形竪穴が掘り込まれた様子が確認された。

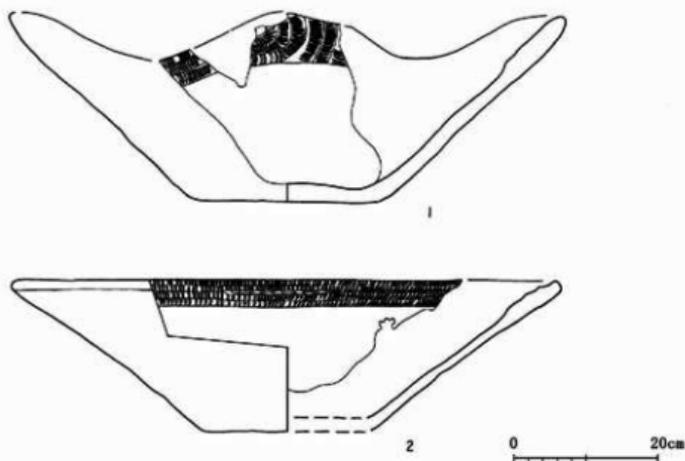
柱穴と思われるビットを検出しない方形竪穴は、正方形に近いもの(第83～87・102・108・112



第30図 128・129・130・131号土坑実測図(9)



第31図 土坑実測図(10)



第32図 第137号土坑出土遺物

号方形竪穴等)と、長方形のもの(第81・82・76・77・78・80・107号方形竪穴等)に分類される。中でも第87号方形竪穴では炭化材が出土している。また第79号方形竪穴からは、鉄製の火打金具と思われる遺物も出土している(第36図19)。

その他、第29図3の第16号土坑であるが、これは堀の西屑部より検出されており、この居館址に関係する遺構と考えられるが、遺物の出土がないために明確にすることができなかった。

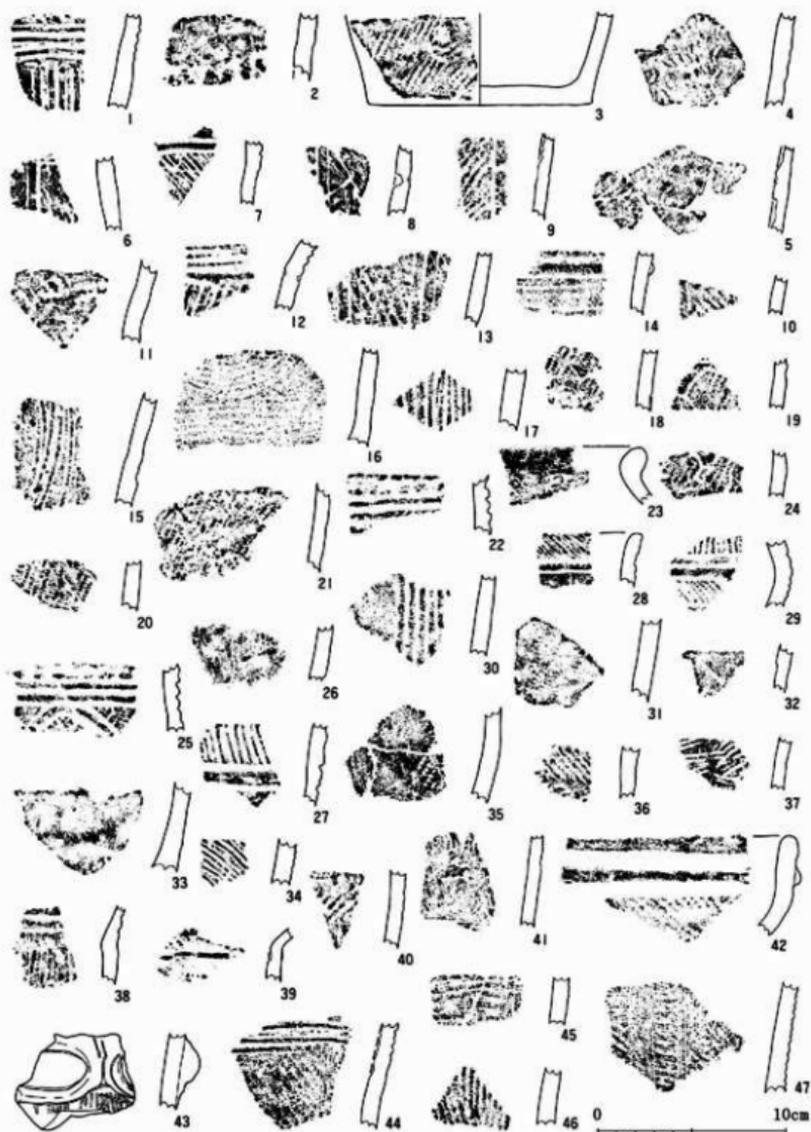
第117・123-124・126-136・157号土坑はいわゆる墓塚と思われ、同じ地点を何回も集中して掘り返している様子がかがえ、覆土もやわらかいものであった。とくに、第128号土坑は、床部に石が敷きつめられており、その上から覆土にかけて銅銭が14枚出土し、いわゆる六道銭と考えられる。また床直上より、陶磁器の破片が出土している(図版23)。第127号土坑は長径4.1mを測るが、これも数回にわたって掘られた結果の形と考えられる。



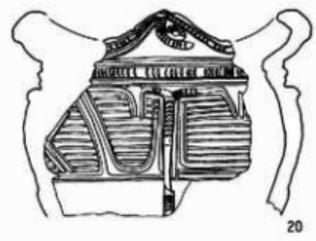
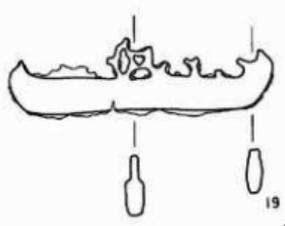
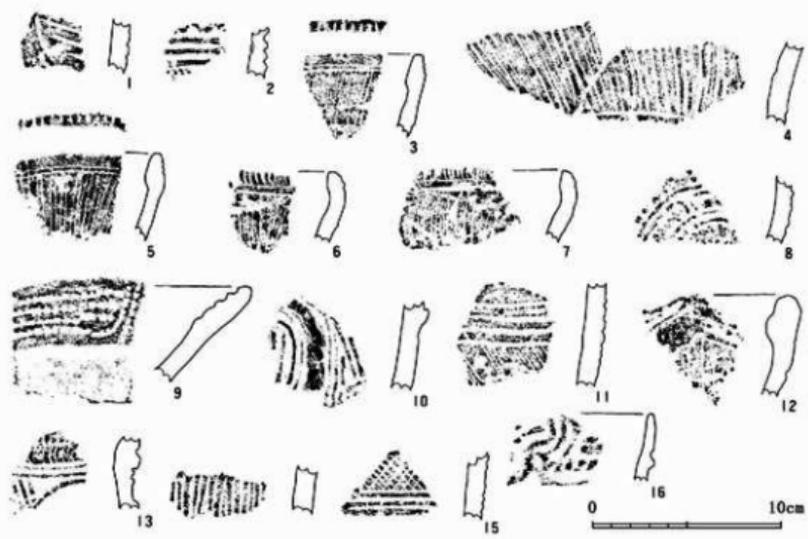
第33図 第57号土坑出土遺物



第34图 土坑出土遺物(1)(1号~20号)



第35图 土坑出土遺物(2)(20号~113号)

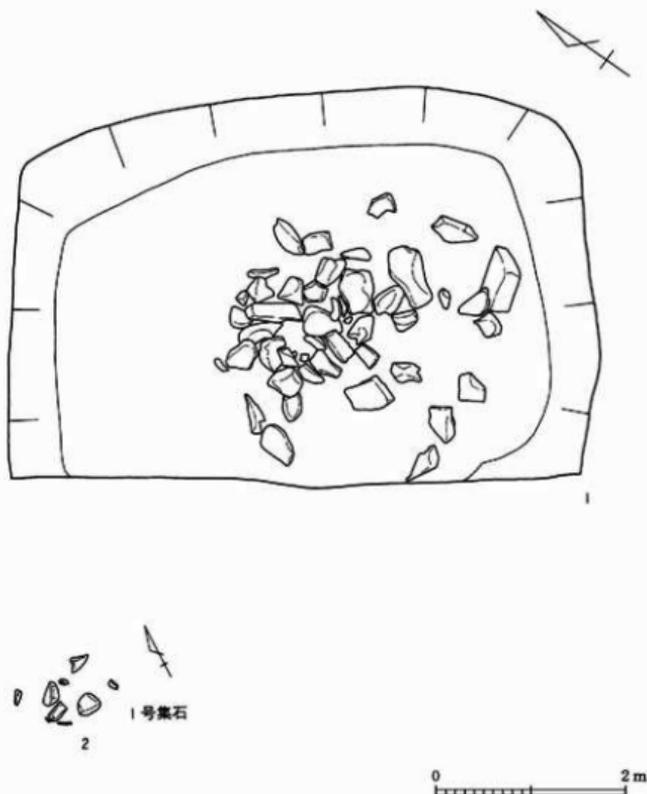


第 36 圖 土坑出土遺物 (3)

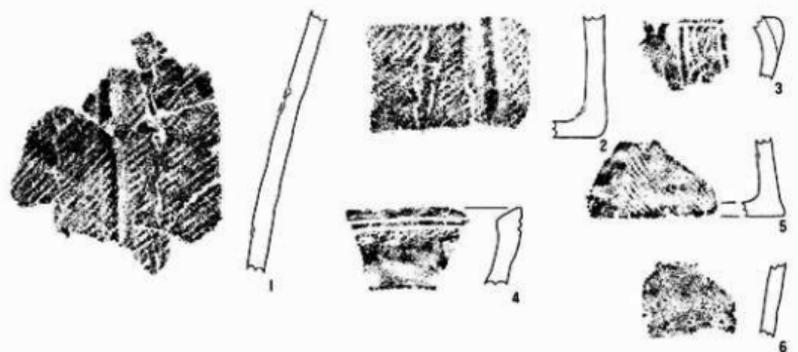
第3節 集石

第37図1はBF-26より出土したもので、居館址の南端部にあたる。この遺構は、本来集石としてではなく、中世の竪穴としたほうが適当と思われる。プランは6.2×4.2mの長方形であり中に石が入っているという状況であった。この遺構からは縄文土器片のほかに第38図8・9のような灯明皿と、小型の壺が出土しており、中世の遺構に位置づけられよう。

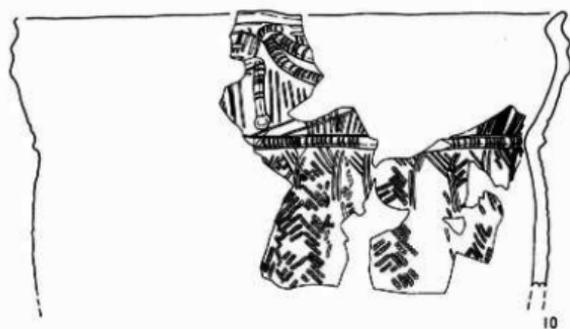
また、第1号集石からは縄文時代中期初頭の土器が出土しており、口縁部には爪形文を施した隆線、体部は縄文地にY字文が施文されている。第2号集石付近からは縄文時代後期の浅鉢が出土しており、縄文の地文に、ヘラ状工具による沈線で文様が描かれている。



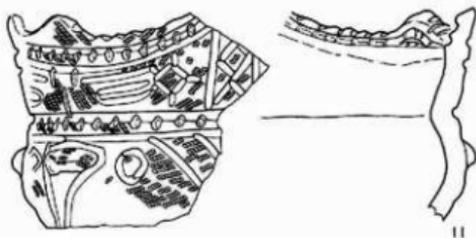
第37図 集石実測図



0 10cm



0 10cm



0 5cm

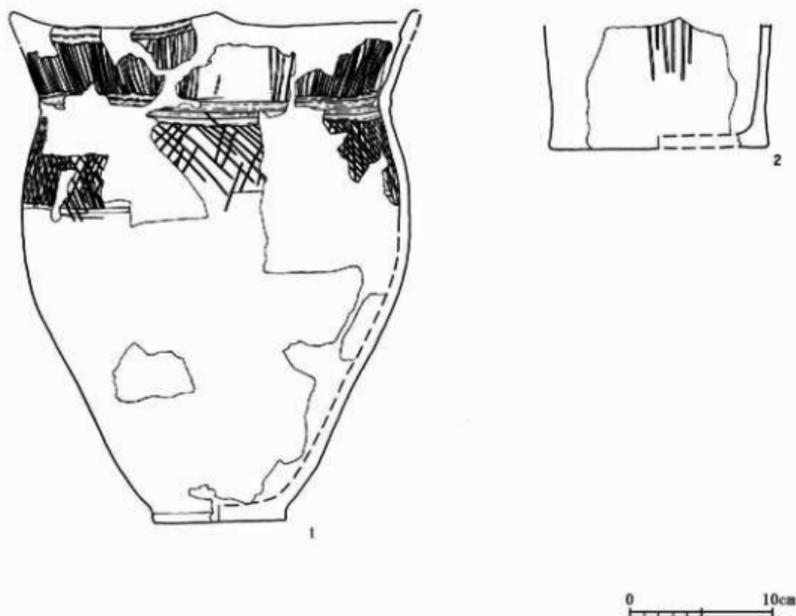
第38圖 集石出土遺物

第5章 その他の遺物

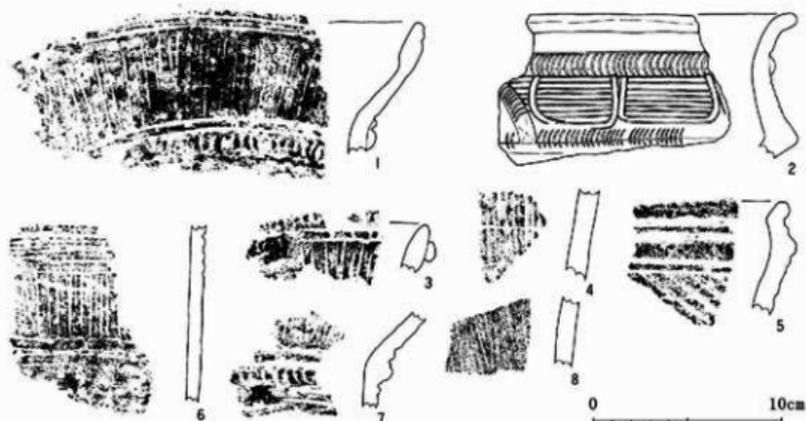
第1節 遺物集中区出土遺物

遺標としては確認することができなかったが、遺物が集中して出土している箇所がCT-49付近より検出されている。

この遺物集中区からは、縄文時代中期初頭の土器が多数出土しており、なかでも第39図1はほぼ形態が判明できるだけの破片が出土した。この土器は口縁部に4単位の突起があり、一度頸部がくびれてから上半部に最大径のある体部へとつながっていくもので、口縁部には半截竹管状工具による縦位の平行沈線が密に描かれ、その下に区画文様として横位の平行沈線がひかれ、格子目文のひかれた体部上半部へと続いている。体部の最大径を測る部分より下部には文様は施文されていない。



第39図 遺物集中区出土遺物(1)



第40図 遺物集中区出土遺物(2)

第39図2は、体部下部であり、垂直に器壁が立ち上がっている。文様は縦位の平行沈線が施文されている。

第40図1・3・4・6・7は縄文時代中期初頭の破片である。1は口縁部が外開きになるもので、口縁部には縦位の平行沈線文が縦位に施文されている。やや直立ぎみに角度を変えて立ち上がる口縁端部には、その後横位の平行沈線が1単位引かれている。また、体部との区画文として横位の隆帯を貼りつけた後に半截竹管状工具による爪形文が施されている。3は口縁部の破片であり、口縁上部には横位の隆帯が貼りつけられており、その上には爪形文がある。この隆帯の下には、間隔の広い縦位の平行沈線文が引かれている。6は体部上部の破片で、横位の平行沈線によって区画された中に縦位の平行沈線文が施されている。施文順としては縦位の平行沈線が先と考えられる。7は頸部の破片で、口縁部と体部を区画するのに爪形文を施した隆帯を貼りつけている。この土器は1と同一個体と考えられる。

これらの土器は焼成が悪かったのか比較的弱い土器である。

2は縄文時代中期中葉の口縁部で、体部が開きぎみに立ち上がり、くの字状に強く屈曲する土器の口縁部である。口唇部がやや肥厚しており、口縁部上部は無文帯としている。その下に、爪形文を伴う隆帯が貼りつけられ、その隆帯の間に、横位の沈線文を主とする文様が充填されている。4・8は縦位の沈線文が施文されている体部の破片である。8は条線文のような沈線が粗雑に引かれている。5は口縁部の破片で、くの字上に屈曲するものである。口唇部は折り返されており、やや外反している。屈曲部には隆帯が貼り付けられ、区画文としている。体部上部には、斜位の沈線文を施している。

第2節 遺構外出土遺物

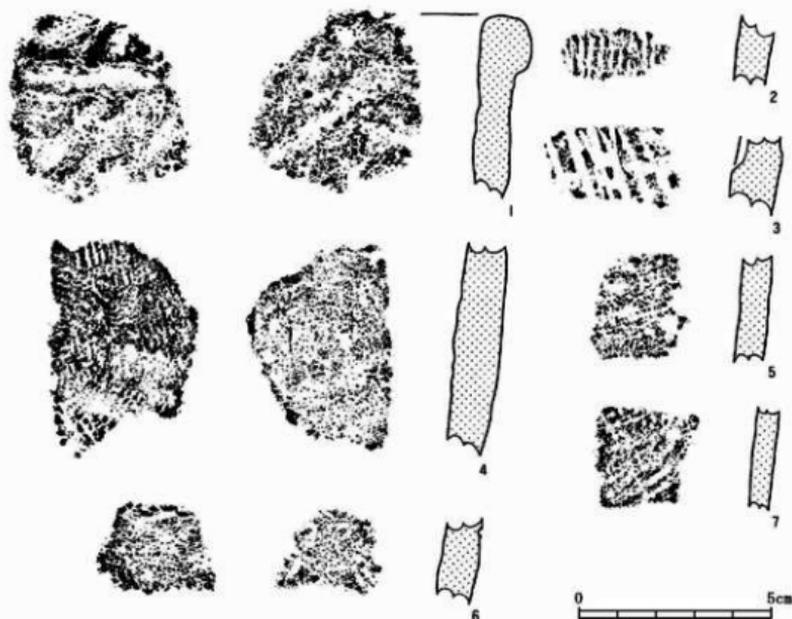
原田南遺跡からは、縄文時代早期から弥生時代にいたる遺構外の遺物が出土している。

縄文時代早期の土器 (第41図)

第41図は、すべて繊維が混入されているもので縄文時代早期末葉の破片である。1は口縁部で口唇部が肥厚しており、その下には竹管状工具を使用した沈線が施文されている。また、2・3は燃り糸文である。4は細かい縄文が施されている。7には縄文が施されている。6には条痕文がみられる。

縄文時代前期の土器 (第42図3・第43図1～7)

第42図3・第43図1～7は半截竹管状工具による平行沈線文を地文として、ボタン状貼付文(第42図3)や浮線押引文(第43図5)、平行沈線によるレンズ状文(第43図4・6)、浮線文(第43図1・2)等がある。これらは前期末葉に位置づけられる。



第41図 遺構外出土土器(1)

縄文時代中期の土器（第43図11～第48図15）

第42図1・2・4～7・第44図～第456 1～14は中期初頭の土器である。

この土器は、体部に縄文を地文として使用しているいわゆる縄文系と、主として沈線文で文様が構成されている沈線文系の土器に大きく2分できる。

まず、縄文系の土器は、第43図12～24・第44図1～11が出土している。体部の破片においては、いずれの土器も結節縄文を地文として施文しており、この地文をつけてから、半截竹管状工具による平行沈線によって、Y字文を引いているもの（第43図12～14・16～20・24・第44図1・4）と、結節縄文が見られないような縄文を地文として、平行沈線によるY字文を施文しているものに分けられる（第43図15・21・第44図5）。その他、第44図14・15にみられるように地文としての縄文が欠落しているものもみられる。また、縦位に蛇行して施文している結節部の間を無文としている破片もある。

体部と口縁部を区画する文様については、平行沈線文を1～2条ほど引き、区画文としているもの（第43図14・15・17・22）と、隆帯を貼り付け、そこに爪形文を施文しているもの（第43図16・第44図13・15）に分けられる。

沈線文系のもは、第42図1・2・4・5・7・第44図13～29・第46図1～15が該当する。このうち口縁部文様帯については、口縁部上端部に半截竹管状工具による押引文を施し、その下部に縦位あるいは斜位、または格子目文様を施文しているもの（第42図1・2・第44図17～19）と口縁部上部から縦位または斜位の沈線文や格子目文を始めているもの（第42図2・第44図20・22・23・25～27・第45図60・61・67）があり、いずれの土器も、横位の半隆起した2条または3条の線によって文様帯が区画されている。その他、口縁部文様帯においては、瓦状押引文もみられる（第42図5・第45図46）。また第45図14では口縁部下部に、印刻文が刻まれている。

体部の文様に関しては、縦位または斜位の平行沈線を施文しているものや、山形文、そしてY字文をはじめとした半截竹管状工具を使用しての曲線を施文しているもの等がある。

その他、縄文を地文としてその後へラ状工具によって曲線の文様を施文している土器片もみられる（第45図24・29・34）が、これは縄文系と沈線文系の折衷様式と考えられる。

なお、第45図38は縄文時代中期末葉の遺物と思われる。

縄文時代中期中葉の土器は、第42図8～10・第46図16～32・第47図1～4があげられる。

第46図17～21・23～28・31は、パネル文の系統である。

これらの中には、規則正しく正方形に区画されているもの（17～20）やパネル文の崩れたもの（23～28）がある。区画文として使用された半肉隆線文の中には、縄文が施文されているもの（23・25～27）と、沈線を充填しているもの（24・28）がある。

第41図8は口唇部にキザミをつけ、その直下に爪形文を伴う隆線を張りつけている。また口唇部には小さな突起が作られている。

第42図10・第46図32は隆線によって文様を形作っているものである。

第42図9・第47図1は平出ⅢAの系統である。両者ともまだ定型化する以前の段階のものと思

われる。

第47図2・3は浅鉢の破片である。いずれも口縁部付近のものである。内面には爪形文が施文されており、2は口縁に沿うようにして幅の狭い竹管状工具を使用している。また3は、4単位の波状口縁を呈していると考えられ、波頂部を中心として、渦巻き状の文様を形作っている。外面には文様はみられない。

第47図31は把手の破片である。口唇部は内側に屈曲し、外面には細い粘土紐を貼り付けて施文している。

第47図5～31・第48図1～15は中期末葉の土器である。いずれも唐草文系の土器が中心で、縦位に沈線を施文した後に隆帯を貼り付けているもの（第47図7・11・16・第48図1）と、綾杉文を施文したのちに隆帯を貼り付けたもの（第47図11～13・17・19～22・25・26・28～31）、縦位の条線文に沈線文で蛇行文等を施文しているもの（第48図2～4・9・10）、縦位の条線文に隆帯を貼り付けて施文しているもの（第48図14）がある。また、第48図7・11～13は加曾利E式系の土器で、縄文を地文としてその上に、隆帯によって施文しているものである。

第42図11・13・第48図16～40・第49図1～14は縄文時代後晩期の土器である。第42図11・13はいずれも後期の深鉢の把手であり、13には磨消縄文もみられる。第48図16・18・20～24・26～32・36・37は磨り消し縄文の土器で、工字文や三叉文を施文している。第48図17は口唇部に縄文を施文している。第48図17は口縁部で、屈曲部には細い隆線を貼り付け、その上に縄文を施文している。第48図19は沈線で区画された中に刺突文を入れている口縁部の破片である。第48図30・33・35は、無文土器で、口縁部付近に沈線を施文しているものである。第48図38～40・第49図1・2は晩期の土器である。第48図38～40・第49図2は浅鉢の破片と思われる。第49図1は深鉢の破片と思われる。いずれのものも横位の沈線文が施文されている。第49図3～14は粗製土器である。これらは、条痕をもつもの（第49図3・7・10・13）や、輪積痕をとどめるもの（第49図6）もみられた。

第49図15～32・第50図1～9には縄文を施文している土器を一括して掲載している。

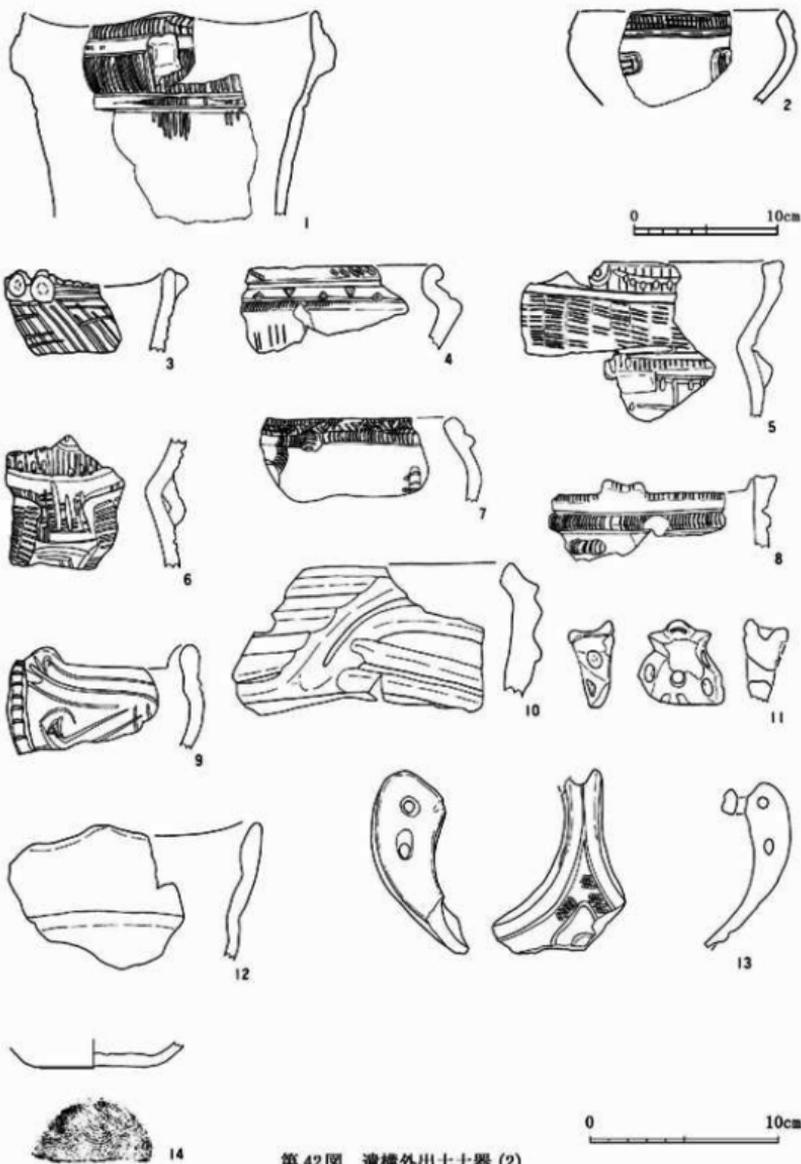
弥生時代の土器（第50図11・12）

図示した2片が今回の調査で出土したすべてであった。両者とも甕の破片であり、振幅の少ないクシ描波状文が数条施文されている。弥生時代後期のものであろう。

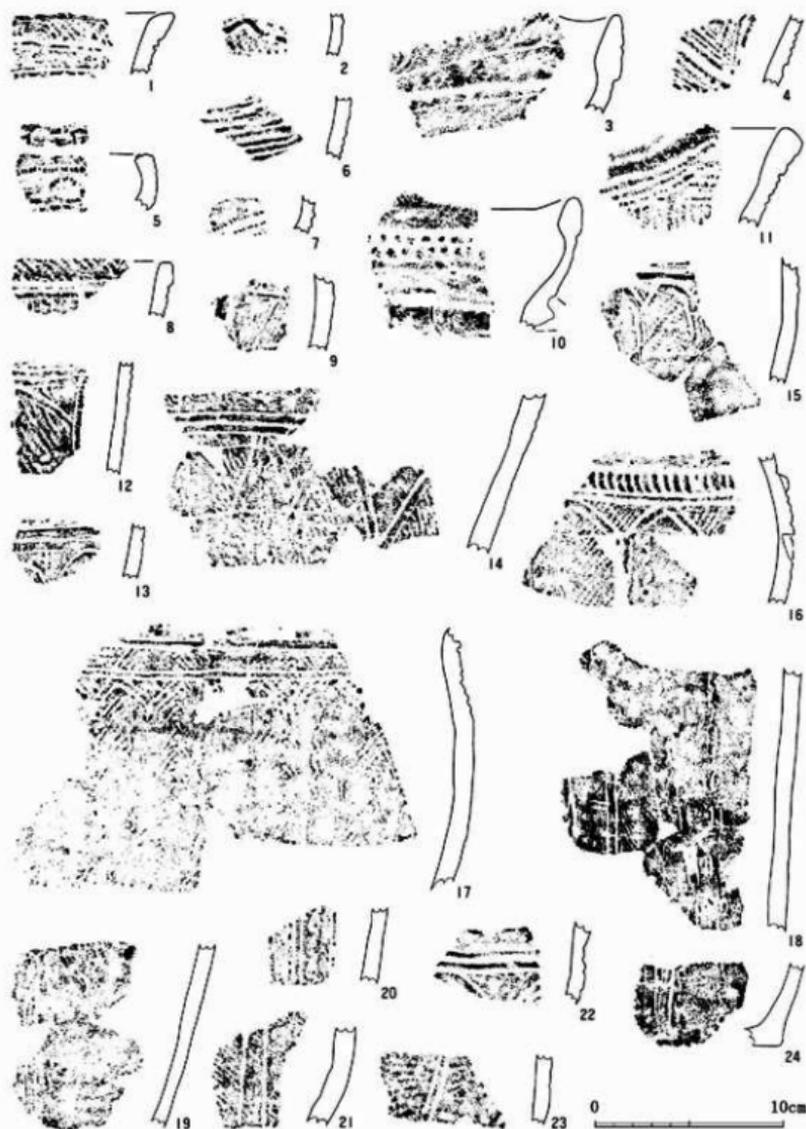
平安時代の土器（第42図14）

土師器杯の底部である。底部に糸切り痕があることから平安時代といえる。

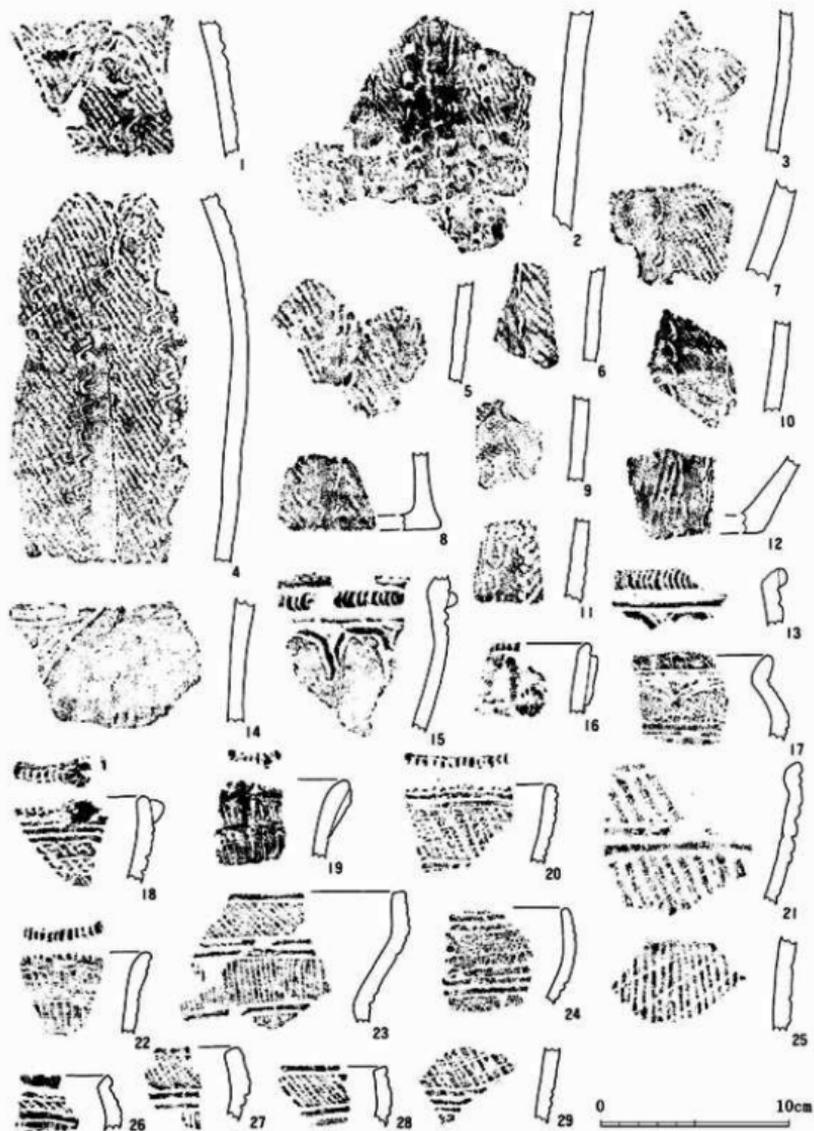
これらの土器のほかに、遺構外ではあるが、土製円盤が数多く出土した。文様の確認できるものは、第51図2・6・7・第52図1・2・7・8・10・15で、いずれのものも縄文時代中期の土器を利用して加工を施していると思われる。



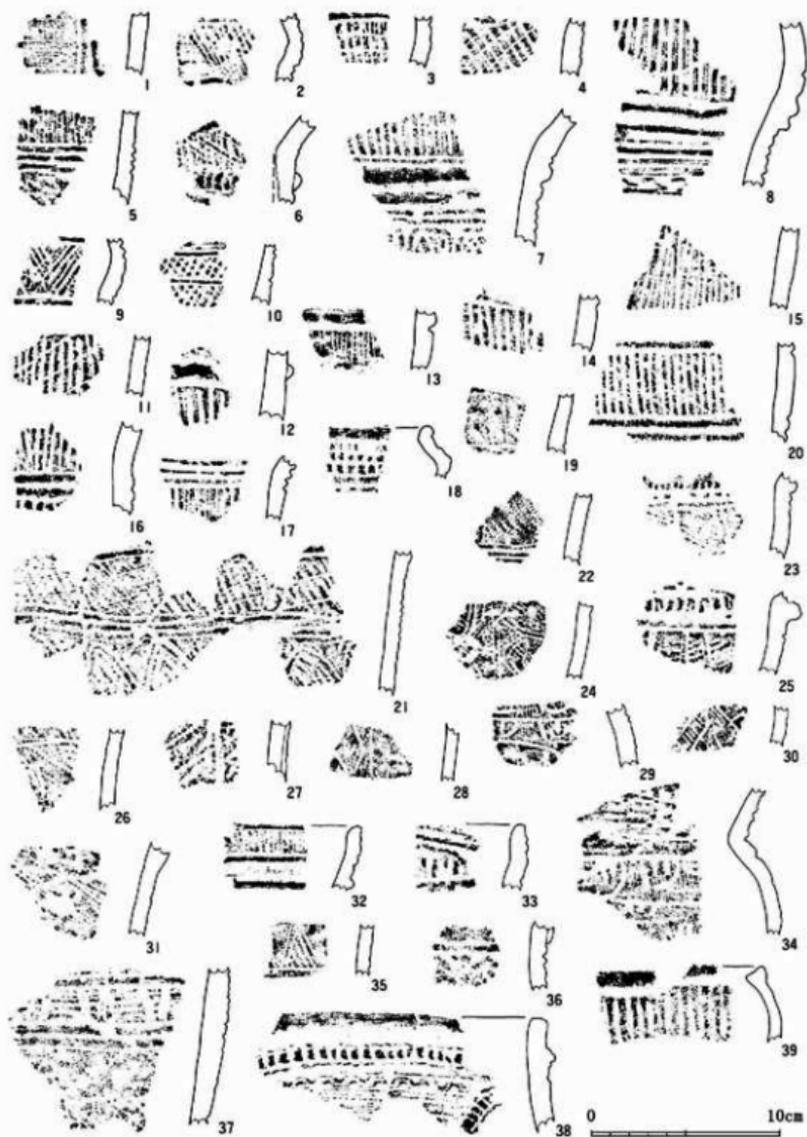
第42圖 遺構外出土土器(2)



第43圖 遺構外出土土器(3)

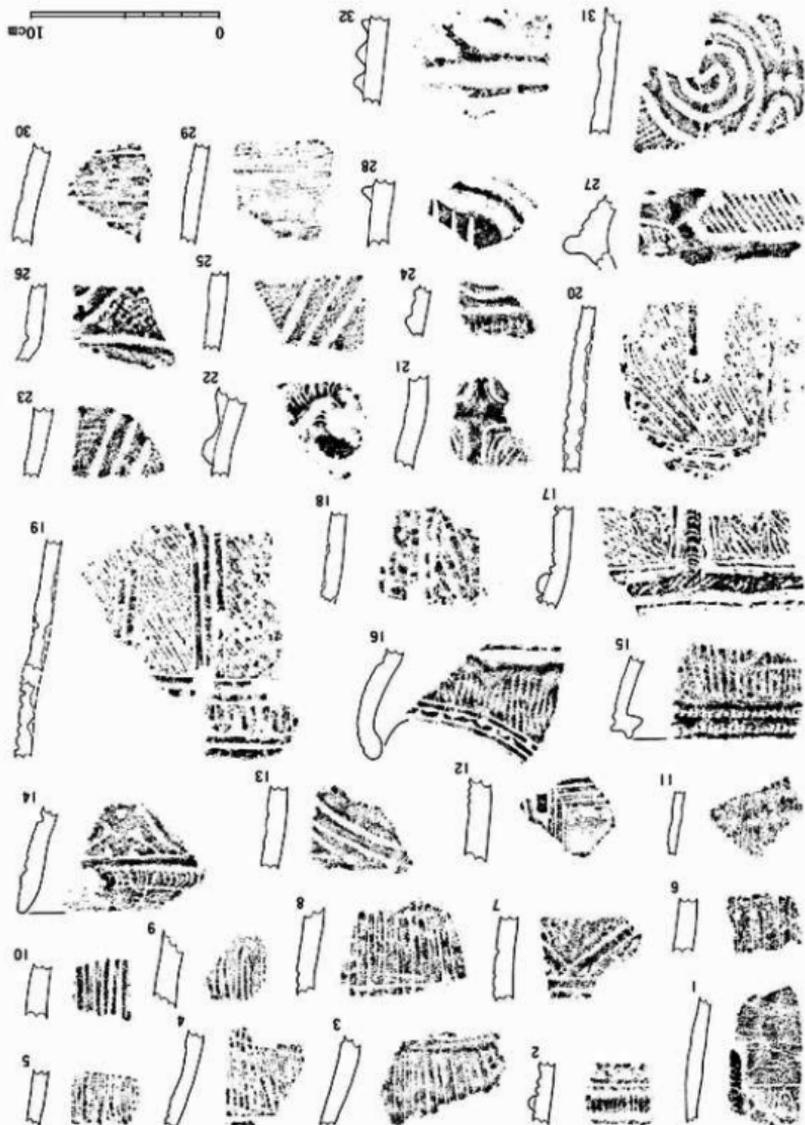


第44圖 遺構外出土土器(4)



第45圖 遺構外出土土器(5)

第46圖 遺構外出土器(6)

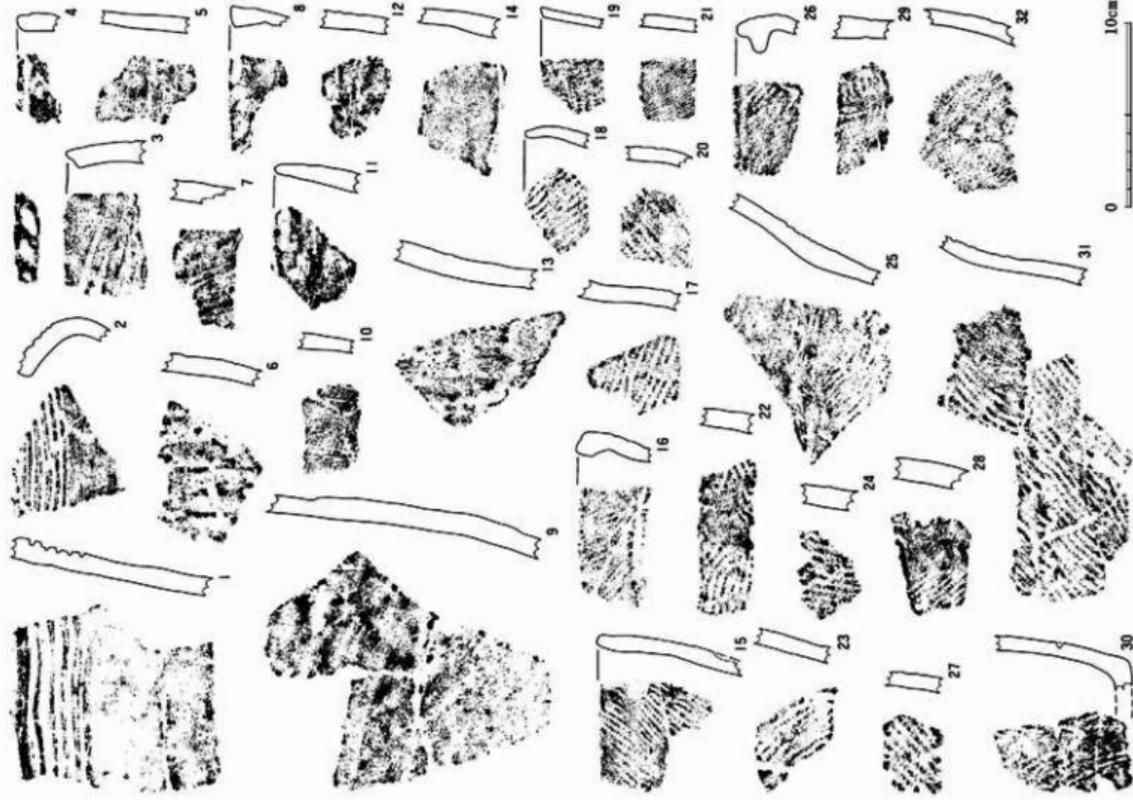




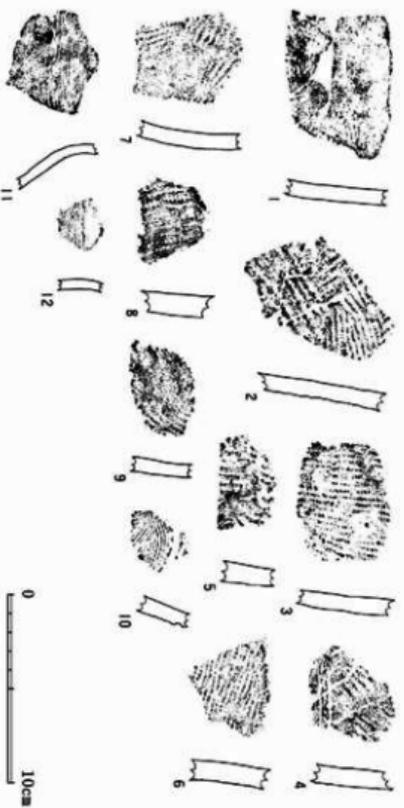
第47圖 遺構外出土土器(7)



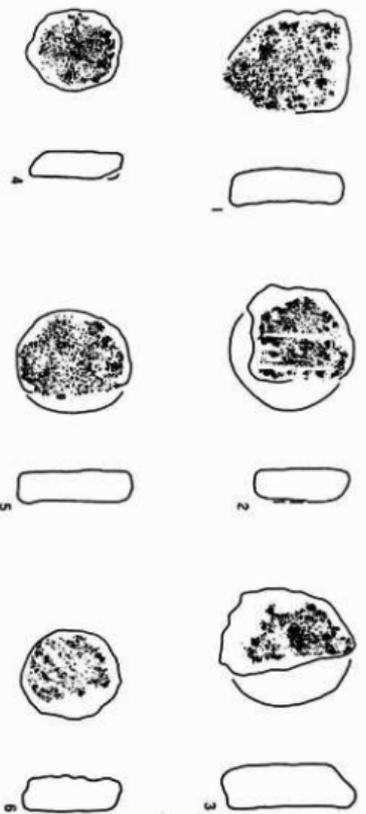
第48圖 遺構外出土土器(8)



第49圖 遺構外出土器(9)



第50圖 濠溝外出土土器(10)



第51圖 土製円盤(1)





第52圖 土製円盤(2)

遺構外出土石器（第53図6・第54図～第60図2・4～第62図・第63図2～第64図）

第53図6・第54図1～16は石鏃である。石鏃は、有茎のものと、無茎のものに大きく分類できる。有形のものは、無茎のものにくらべて大きい。第54図5は、その残っている部分の様子から、比較的大きな石鏃と思われ、有茎の石鏃の可能性がある。

無茎のものは長さや幅の比率が同じものと、長さのほうの比率が大きいものに分けることができる。比率が同じものは、第53図6および第54図2が該当し、長さの比率が大きいものは、第54図3・4・6・7が該当する。比率の同じものは、長さの比率が大きいものにくらべると、茎部の挟りが小さい傾向がうかがえる。なお、第54図9は、茎部が大きく挟られていると思われ、縄文時代早期の石鏃の可能性が高い。

第54図8・12～16は石鏃の未製品である。12は整形段階に破損してしまったと考えられるが、他のものは何らかの理由によって成形途中で廃棄されたと思われる。なお、15については、ここでは一応石鏃の未製品としたが、小剥離もあり、他の用途に使用された石器の可能性もある。

第54図17は、石錐である。刃部の先端部分が欠損している。

第55図1～10はヒエス・エスキューと思われる。このうち、外形が台形で、上下に打撃による剥離が確認され、縦長の剥離痕が確認できるものは、1・3～6・10であった。

第55図11～第58図は剥片を利用してその一部を刃部として利用しているものである。このうち第57図4は作りが丁寧であり、上部につまみ状のものが付く可能性があり、石匙の欠損品の可能性も否めない。

以上黒曜石製の石器を見てきたが、ここに図示した石器は発掘によって出土した黒曜石の破片の総数からするとごくわずかなものである。

第59図～第60図2・第60図4～第62図・第63図2～第64図2は石斧である。

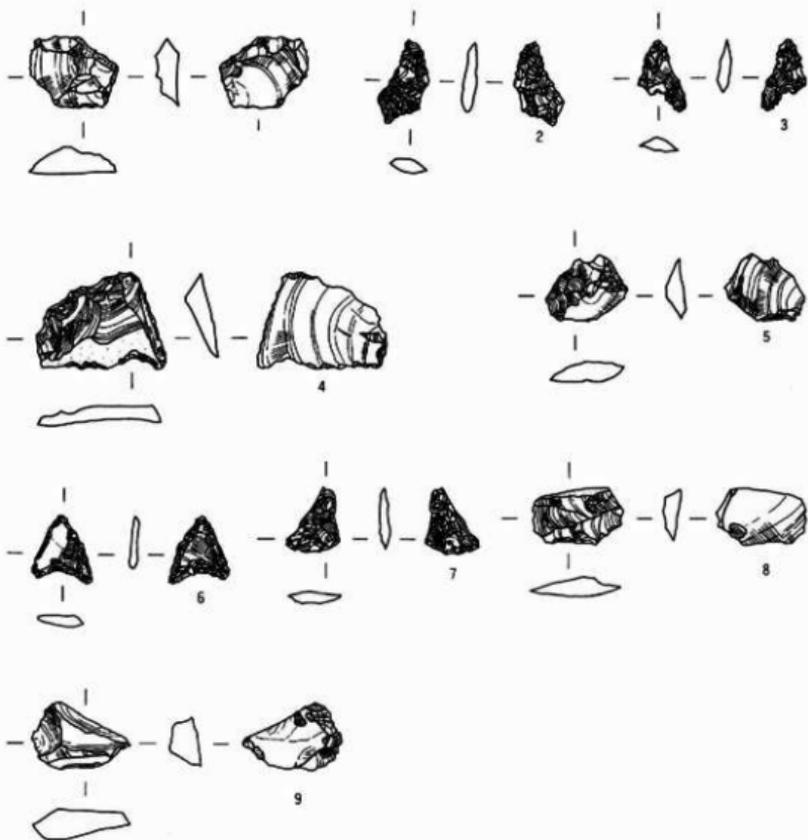
打製石斧は大きく短冊形・バチ形・分銅形に分類できるが、短冊形の中にも、長さの短いものと、長いものに分けられる。

短冊形は、第59図1～4・6・第60図1・2・4・5・第61図～第62図・第63図2・3が相当する。これらはさらに基部が刃部より幅が狭いものと、基部と刃部の幅が同じか同程度のものに分類できる。また基部が刃部より幅が狭いものについて、大型のもの（第60図2・4・第62図1・4・5）と小型のもの（第59図1・3・4）とに分類することができ、これについては刃部と基部の幅が同じものでも同じことがいえ、大型のものは第60図5・第62図2・3・5、小型のものには第59図6・第60図1・第61図があげられる。

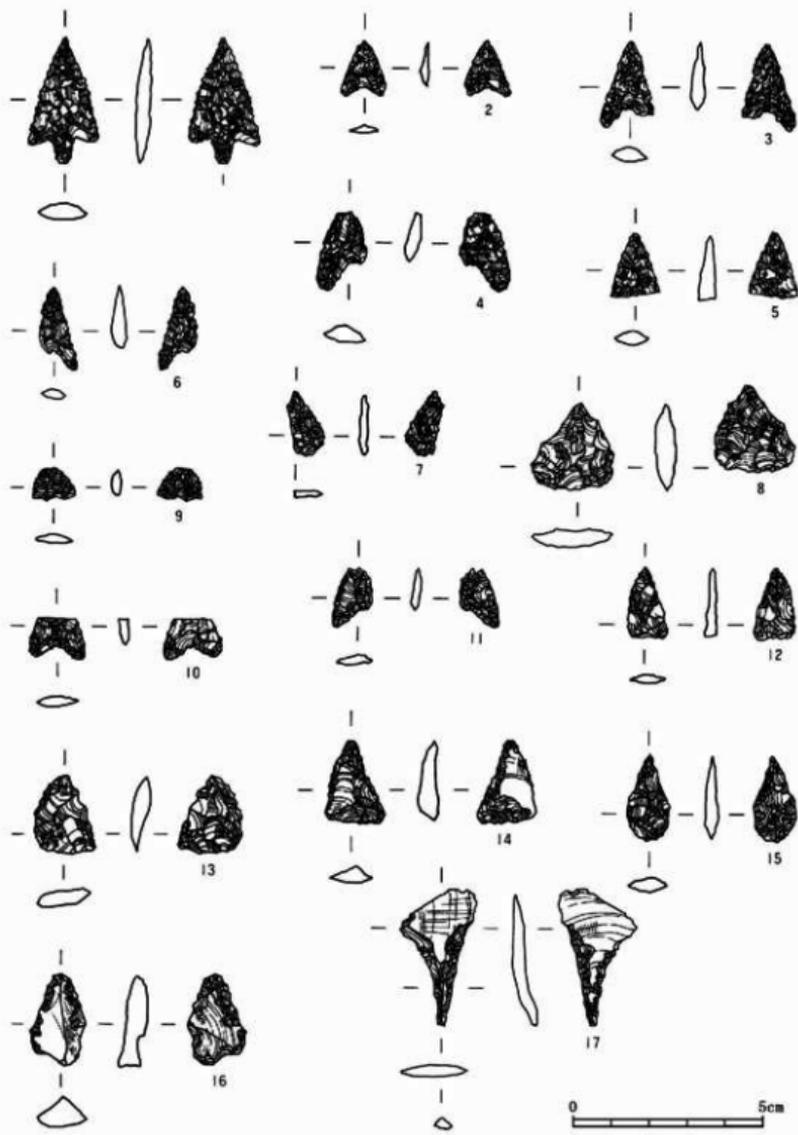
バチ形は、第59図5・第63図5があげられる。

分銅形は、第63図4・5があげられる。

以上の石器のほかに、磨製石斧（第64図2）や、凹石（第84図3）、磨石（第84図5）が出土している。磨製石斧は刃部が欠損しており、凹石、磨石についても、大きく欠損して出土している。



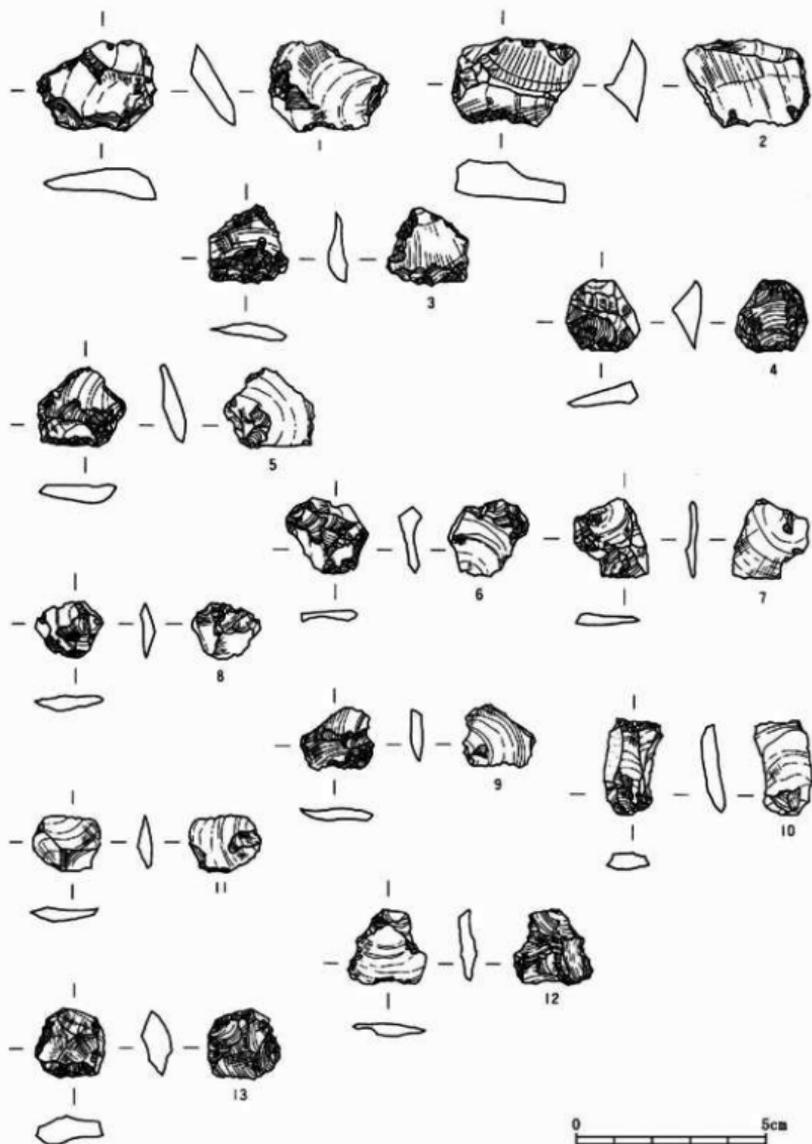
第53圖 出土石器(1)



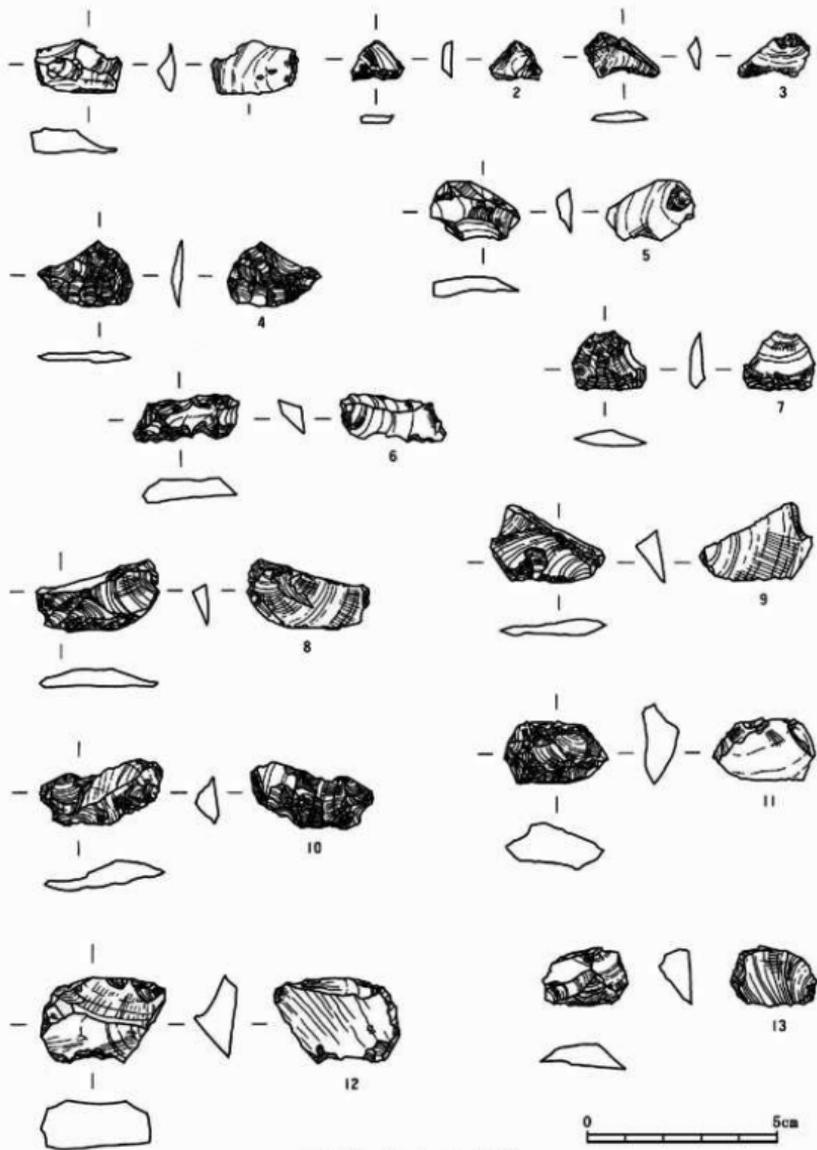
第54圖 出土石器(2)



第55圖 出土石器(3)



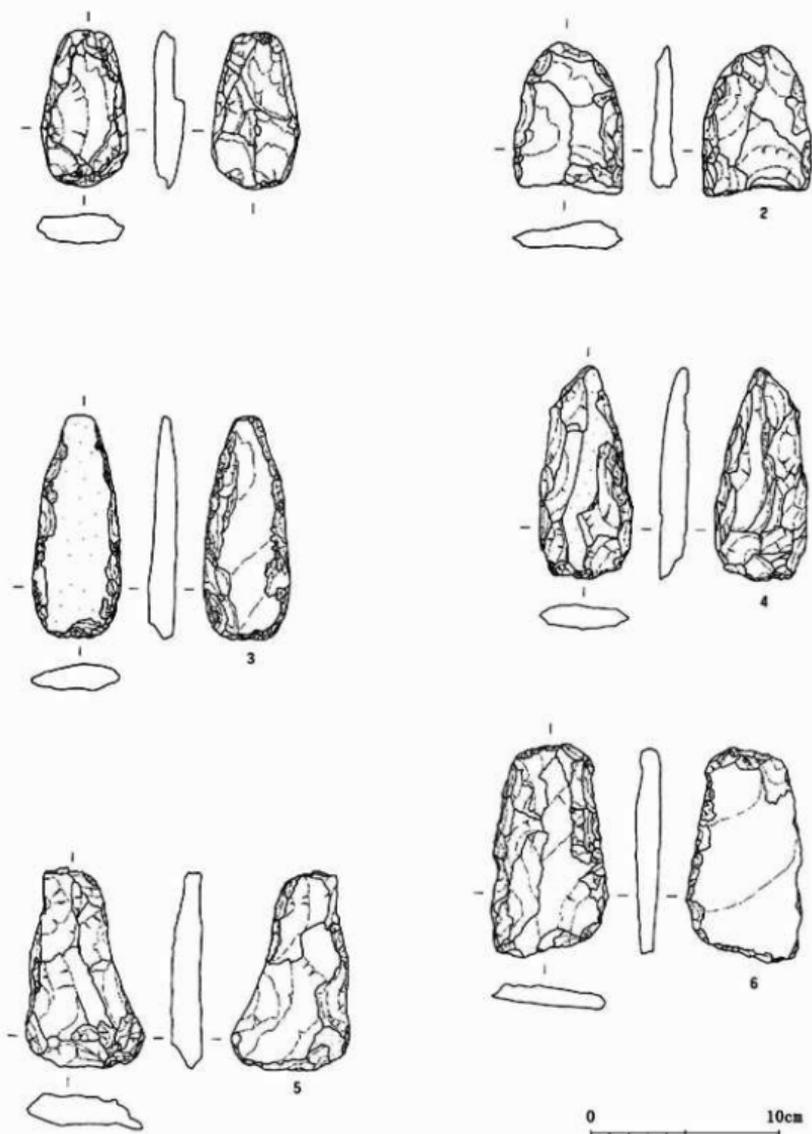
第56圖 出土石器(4)



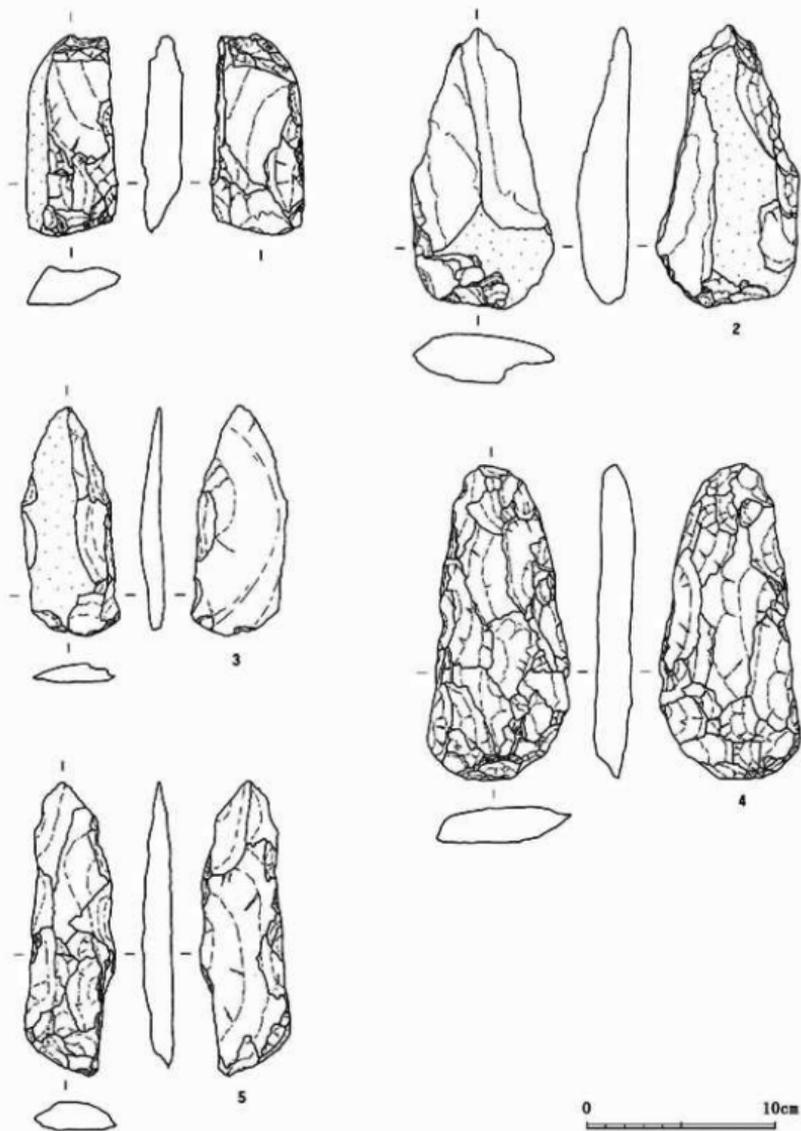
第57圖 出土石器(5)



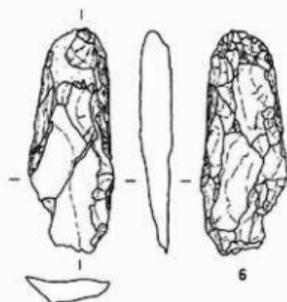
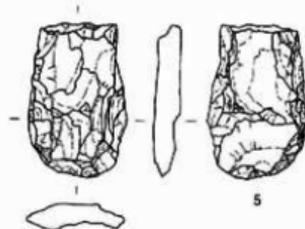
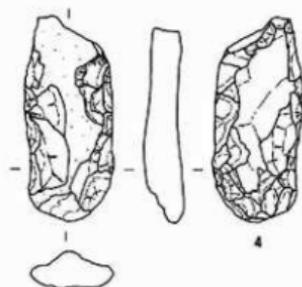
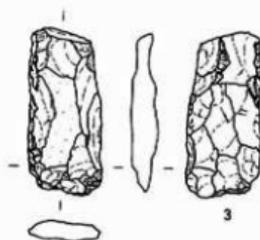
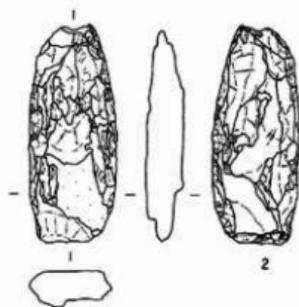
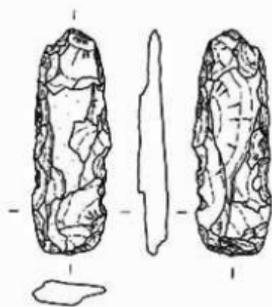
第58圖 出土石器(6)



第59圖 出土石器(7)

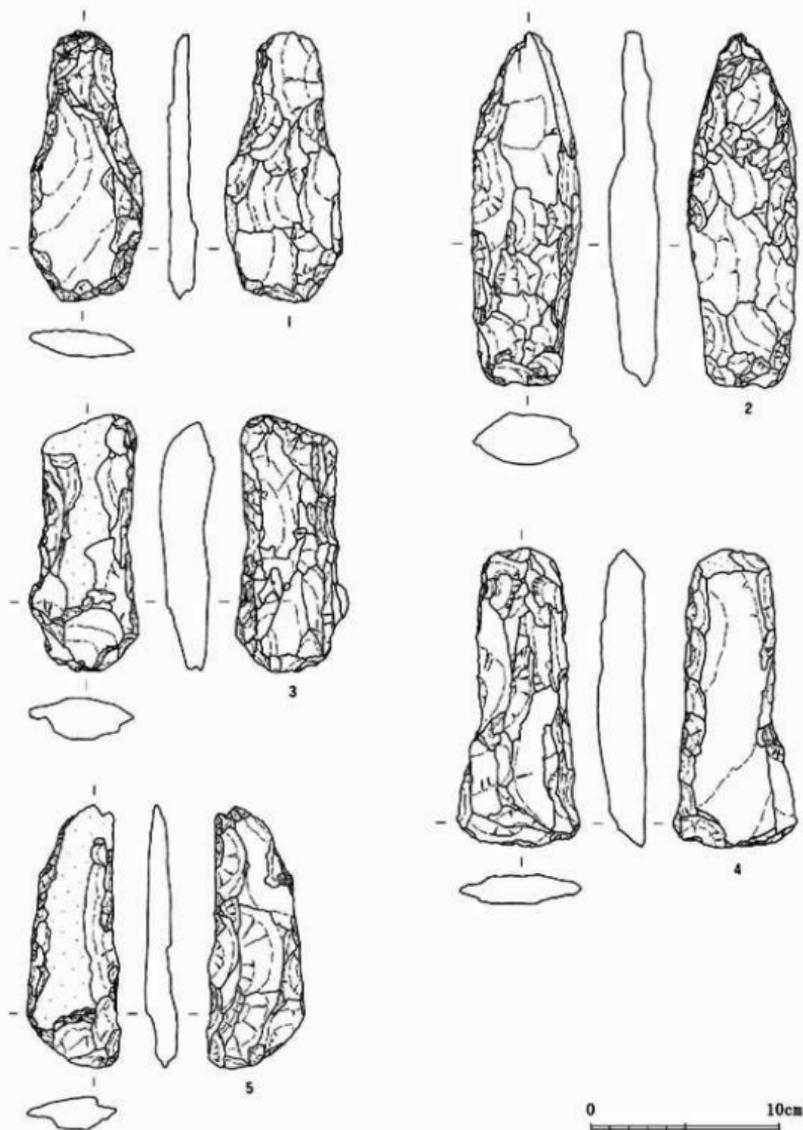


第60圖 出土石器(8)

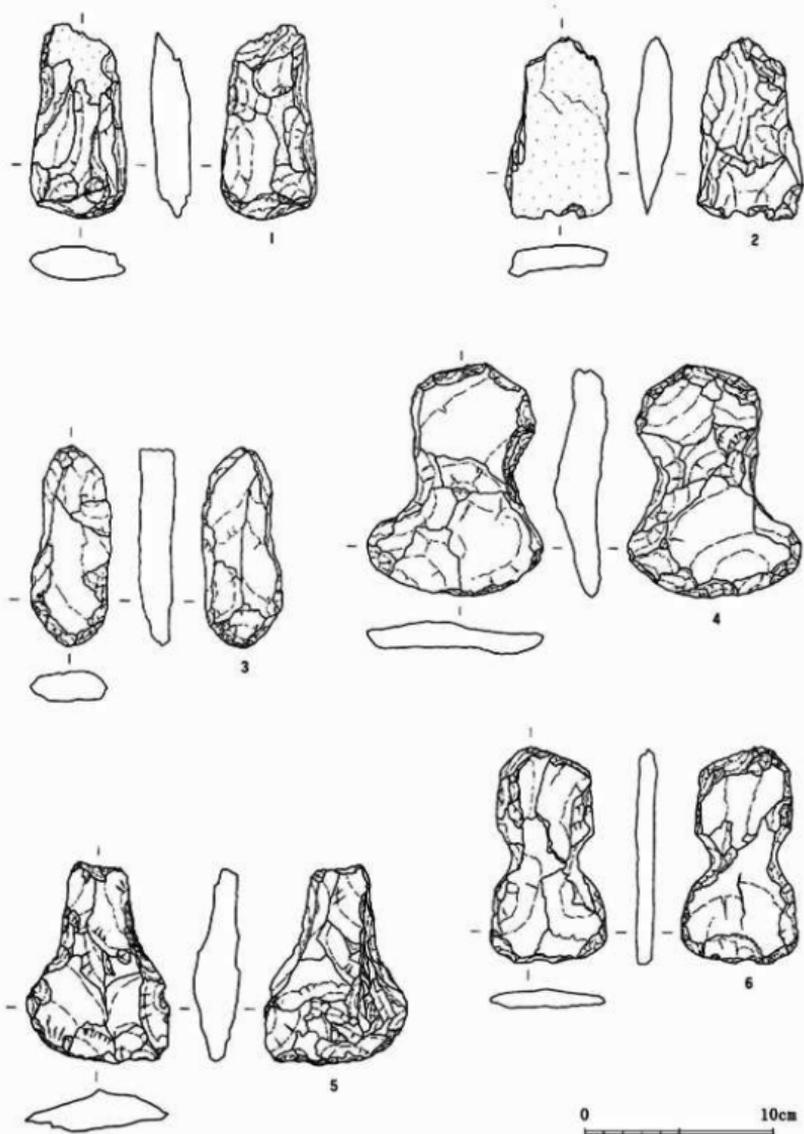


0 10cm

第61圖 出土石器(9)



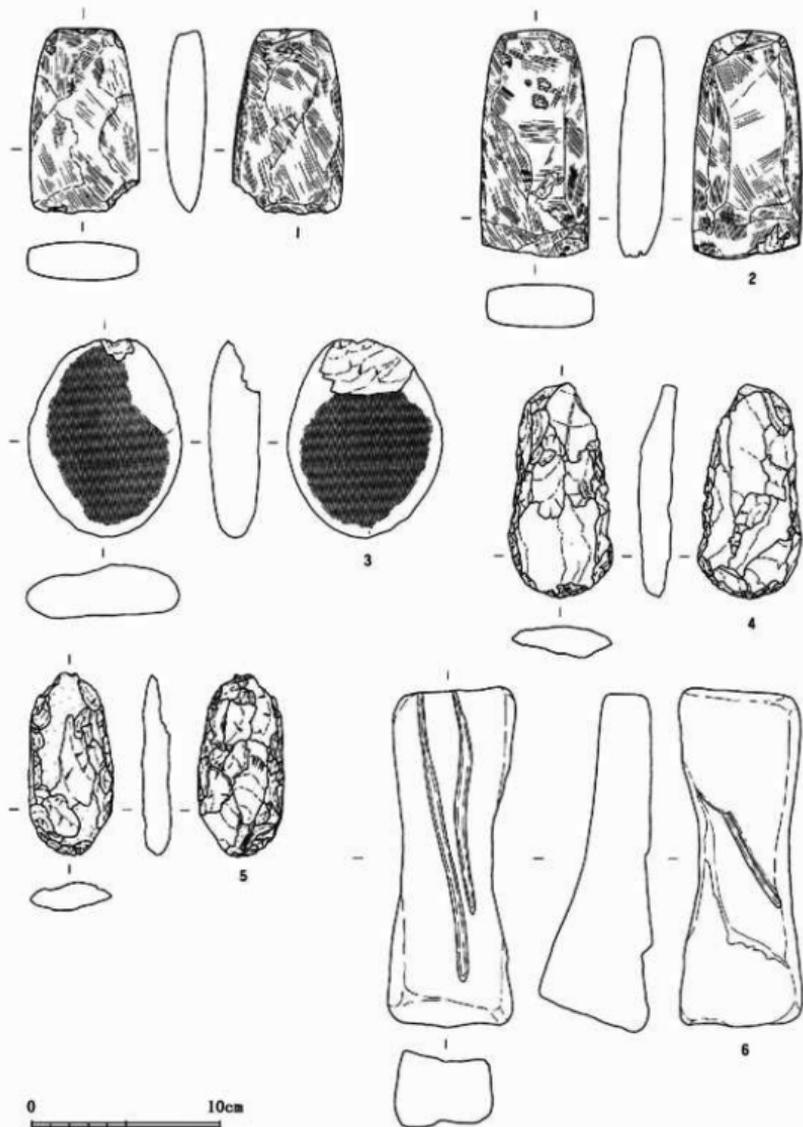
第62圖 出土石器(10)



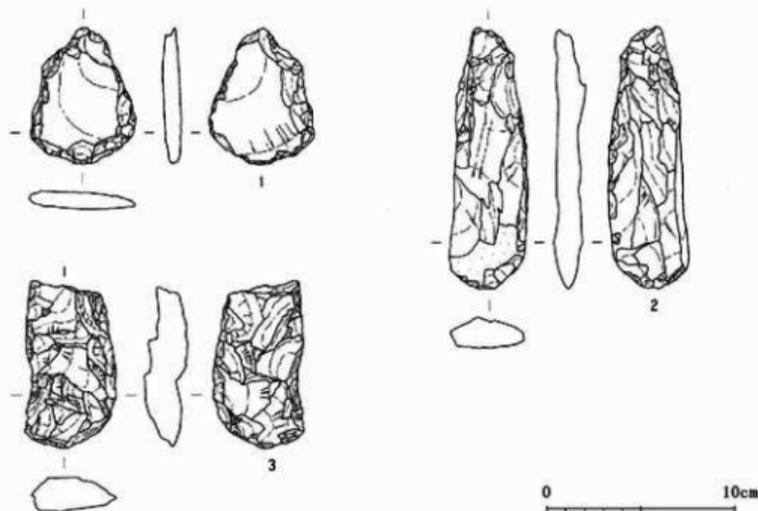
第63圖 出土石器(11)



第64圖 出土石器(12)



第65圖 出土石器(13)



第66図 出土石器(14)

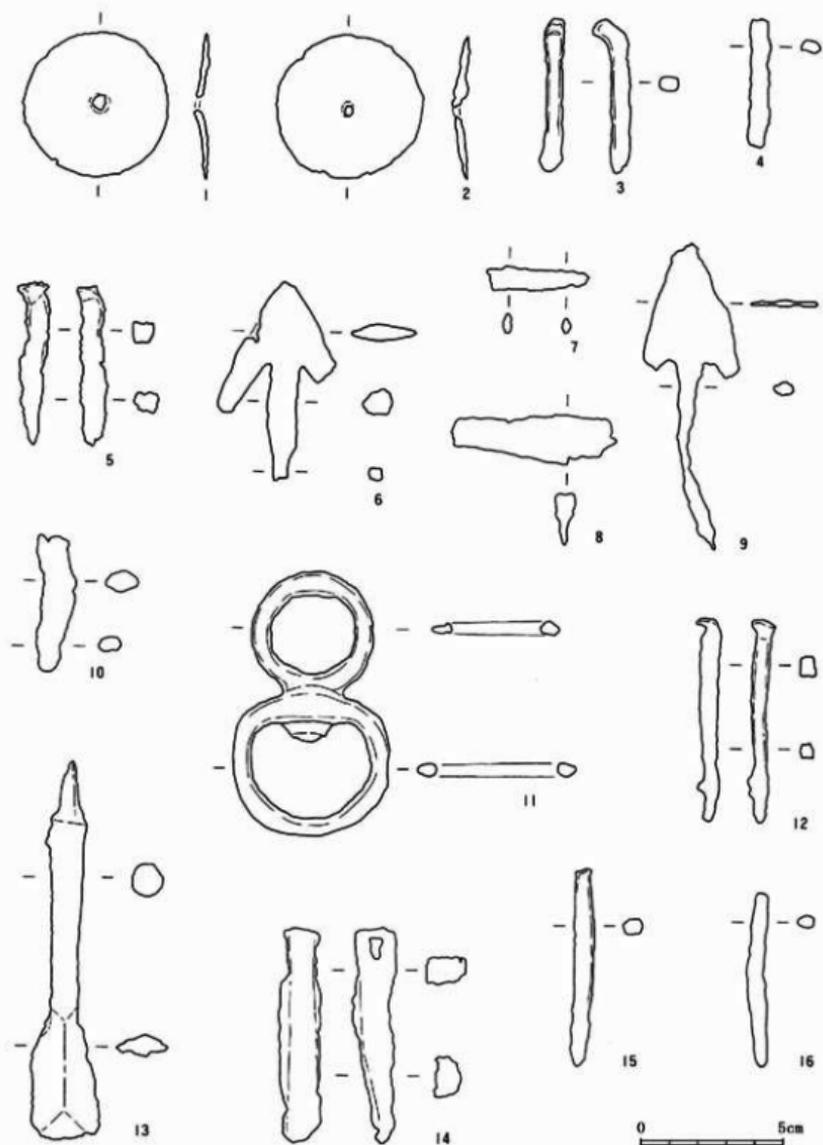
第3節 中世の居館址

今回の調査においては、前述しているような方形竪穴遺構のほかに、堀、柱穴が多数発見された。方形竪穴遺構については前述のとおりの結果であったが、居館址については、調査対象地区のいわゆるⅡ区の南区とⅢ区に出土している（全体測量図参照）。

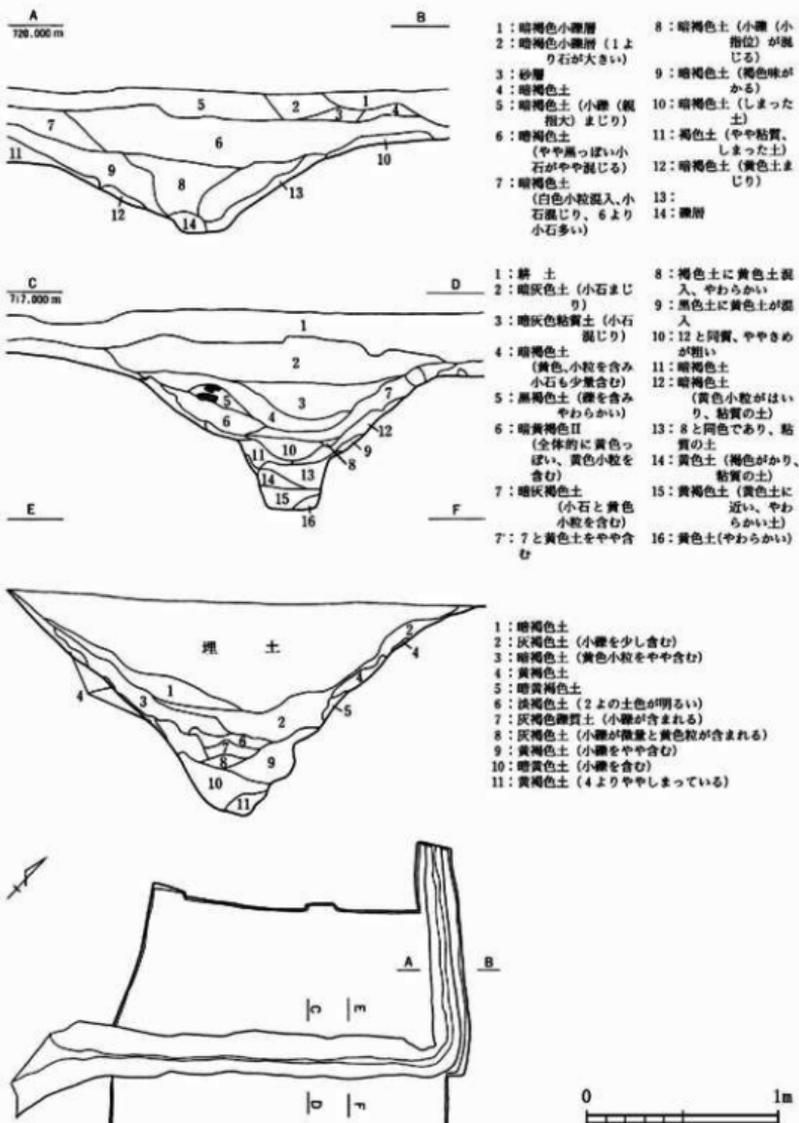
堀はⅢ区で出土しており、東西の堀の西側より南北の堀の南側にむかうにしたがって深くなっていった。堀の南端は、居館址の脇を東流して天竜川へと注ぎ込む五軒屋川へ掘り抜いていた。この堀によって囲まれた地区には、鉄鍬が出土しているほか、陶磁器も数としては少量であるが出土している。堀の内部には、柱穴が多数出土しており、南北の堀に平行して数棟の掘立柱建物址が存在していたようである。

また、Ⅱ区南には、中世時に五軒屋川にむかった端に2か所大きく1段掘り下げており、なにか施設を作ったように柱穴が周囲を取り囲むような形で検出されている。その東には数棟の掘立柱建物址が出土していることから、この調査区にも中世の居館址に関連する施設が存在したと思われる。

出土遺物としては、内耳土器・陶磁器等日常用品の出土が少なく、時期を明確にすることは難しいと思われる。



第67圖 出土鉄器



第68図 堀土層断面図

第6章 ま と め

今回の調査によって、この遺跡は全範囲の半分ほどを調査したこととなる。

まず縄文時代の住居址であるが、今回3基出土し、この内2基が中期末様の唐草文系土器を出土する住居址であった。第1号住居址は、前述のとおり北西の壁について拡張が行われている形跡があり、柱穴については特に建替えられている痕跡は確認できなかった。しかし、第5図1の埋甕の内側のP.5からは、加曾利E形の土器が破壊された状態で出土しており、接合した結果ほぼ完形となる状況からすると、おそらく拡張以前に埋甕として存在していたといえ、拡張後に破壊されて埋められたと考えられる。出土している土器の状況からすると、時期的にはほとんど差が見出せないことから、あまり長時間使用した後での拡張とは考えにくい。

次に第2号住居址であるが、この住居址は中世の遺構によって破壊されている部分があったものの、住居址内には、ほぼ完全な形で炉が残っていた。この炉は、横1.5m、縦1.2mで、やや横長の楕円形をしている。この炉は、長さ50cm、幅40cmほどの平石を6個立てて設置し、入口付近の石は2個寝かせて据えつけている。その後比較的小さな石を平石の空間を埋めるように詰め込んで炉石の間に隙間がないように工夫されている。この炉の内部は石を含めて非常に赤色化している状況から、強い火を焚いていた可能性がある。また、P.5付近には、第14図1の土器が、上部に石を乗せた形で出土している(図版6)。これは、住居址が使用されていた時からの状況なのかを明確にすることができなかった。

中世の住居址においては、遺物が出土していないため時期は不明である。しかし、この住居址が出土した調査区の西と南には居館址が出土しており、この遺構との関連性について検討する必要があると思われる。なお住居址の周辺には墓塚が多数出土している。

居館址については、現在では言い伝え、文献等がなく、全く知られていないものであった。今回の調査によって主郭部と思われる箇所が一部かかったが(堀の西側部分)、この箇所には多数の柱穴が出土しており、堀に沿って2~3棟並んでいた状況は推測する事ができるものの、建物の規模については明らかにすることができなかった。また、出土した遺物も、非常に少なく、生活していた状況を伺い知るだけの点数がない。出土している遺物の時期は、およそ13世紀~16世紀、そして江戸時代の陶磁器が出土している。このように、居館址の存在していた時期を遺物から判断することは今のところ難しい。出土している堀が矢研堀であることから、16世紀前半頃までの時期と推定される。一方、居館の範囲については、今回の調査区から西側のJR飯田線をおえ、国道153号線付近までと現地の地形より想定できる。

以上のように、この遺跡については問題点が数多く残されており、これからの検討課題としていかなければならない。

おわりに、整理にあたり井上喜久男氏、北沢武志氏より遺物について多くの貴重なご教示をいただきました。末筆ですが感謝申し上げます。

写真図版



新町原田南遺跡遠景



第三調査区

图版 2



第 I 調査区南



第 II 調査区北



第Ⅱ調査区南

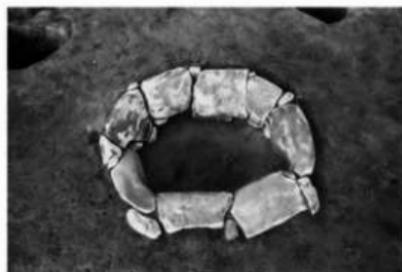


第Ⅱ調査区南

图版 4



第1号住居址



第 2 号住居址 (1)

图版 6



第2号住居址(2)

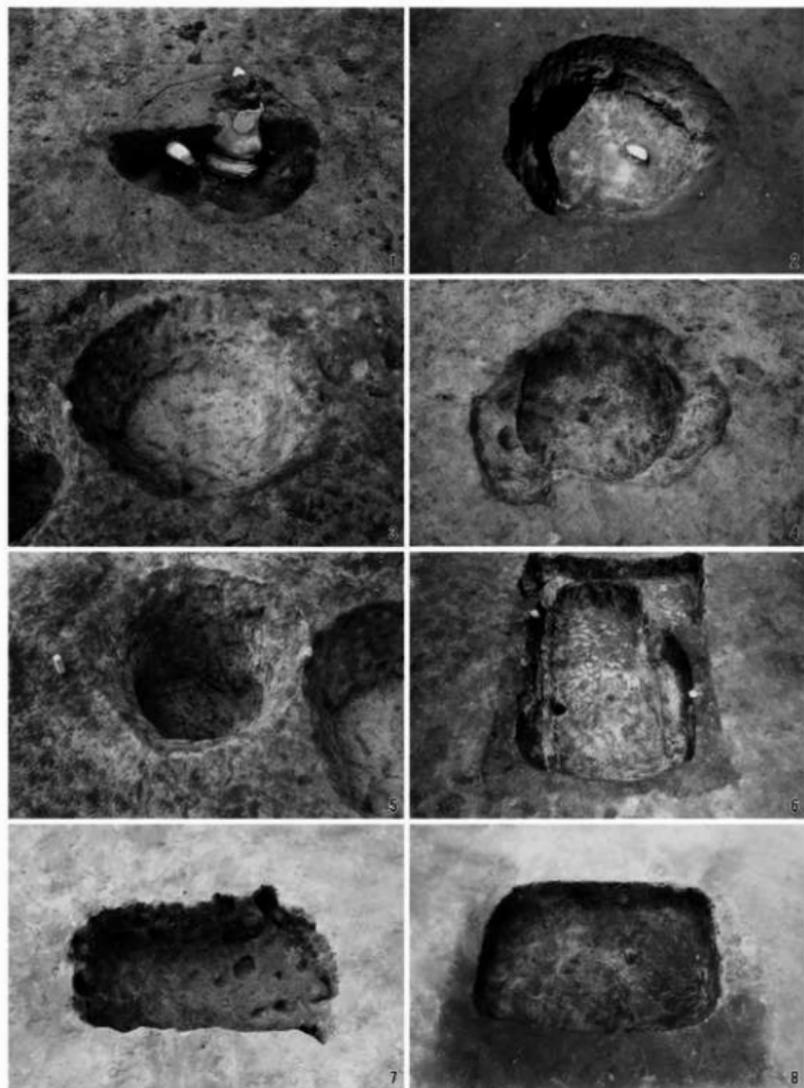


第 3 号住居址



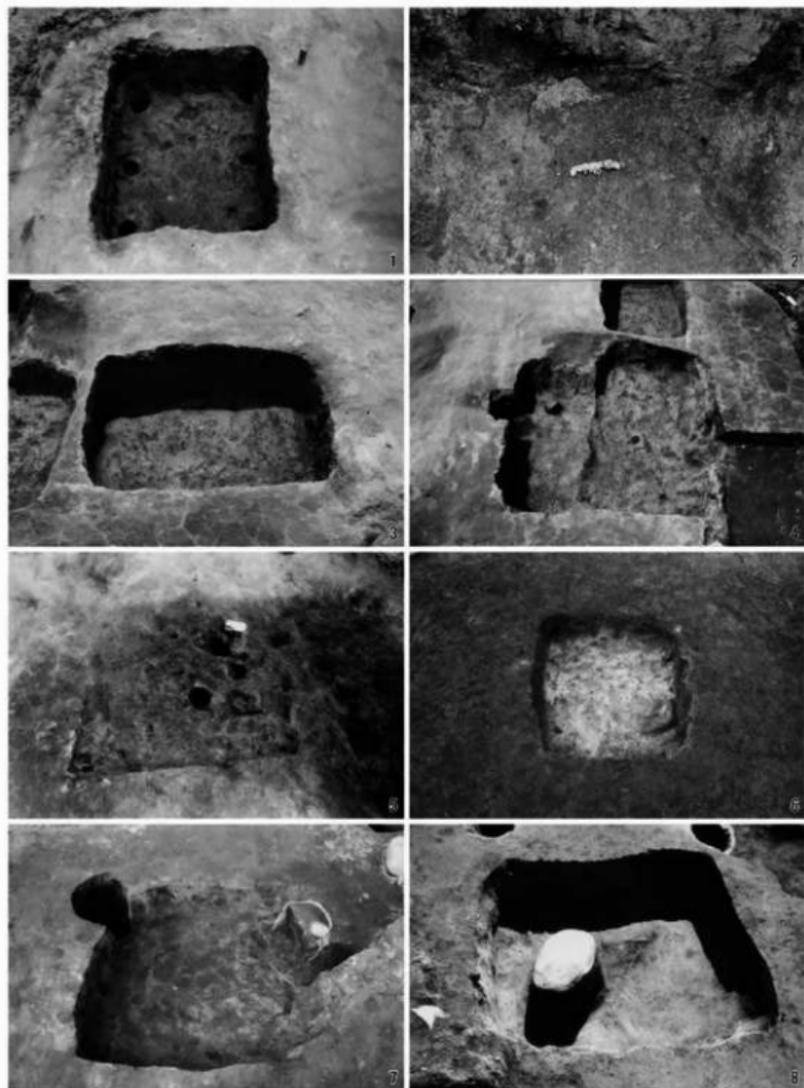
第 4 号住居址

图版 8



土坑(1)

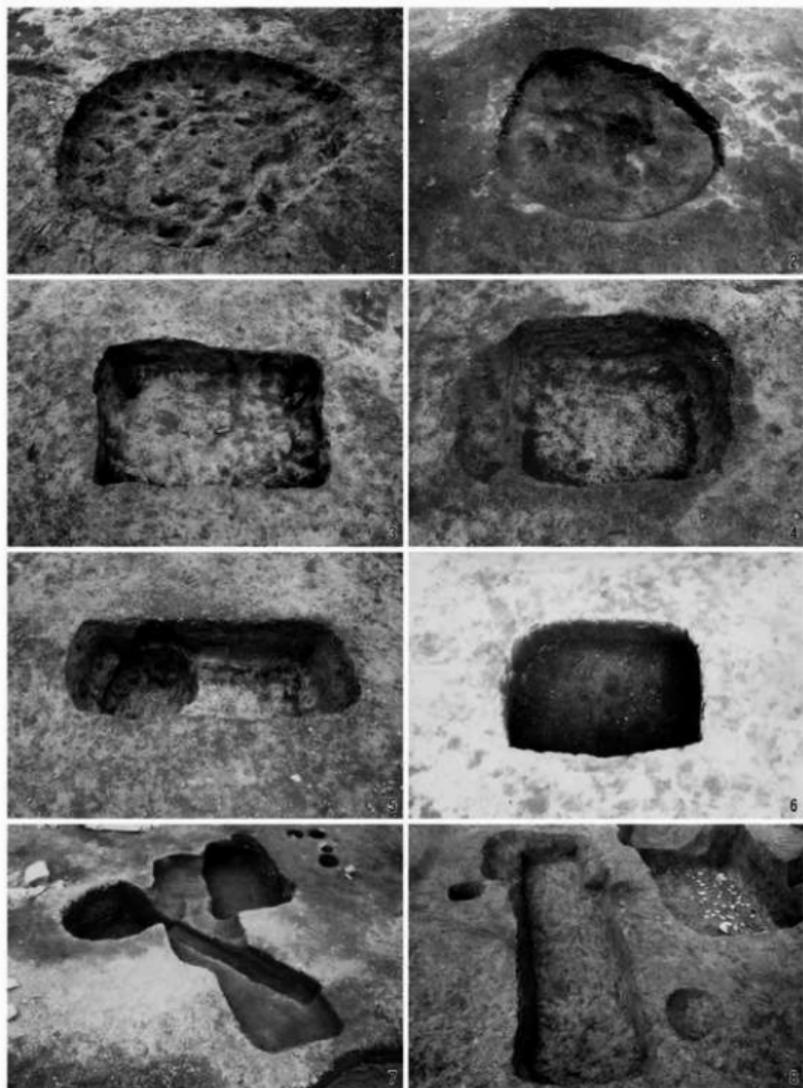
(1·2: 2号, 3: 7号, 4: 17号, 5: 37号, 6: 75号, 7: 77号, 8: 78号)



土坑(2)

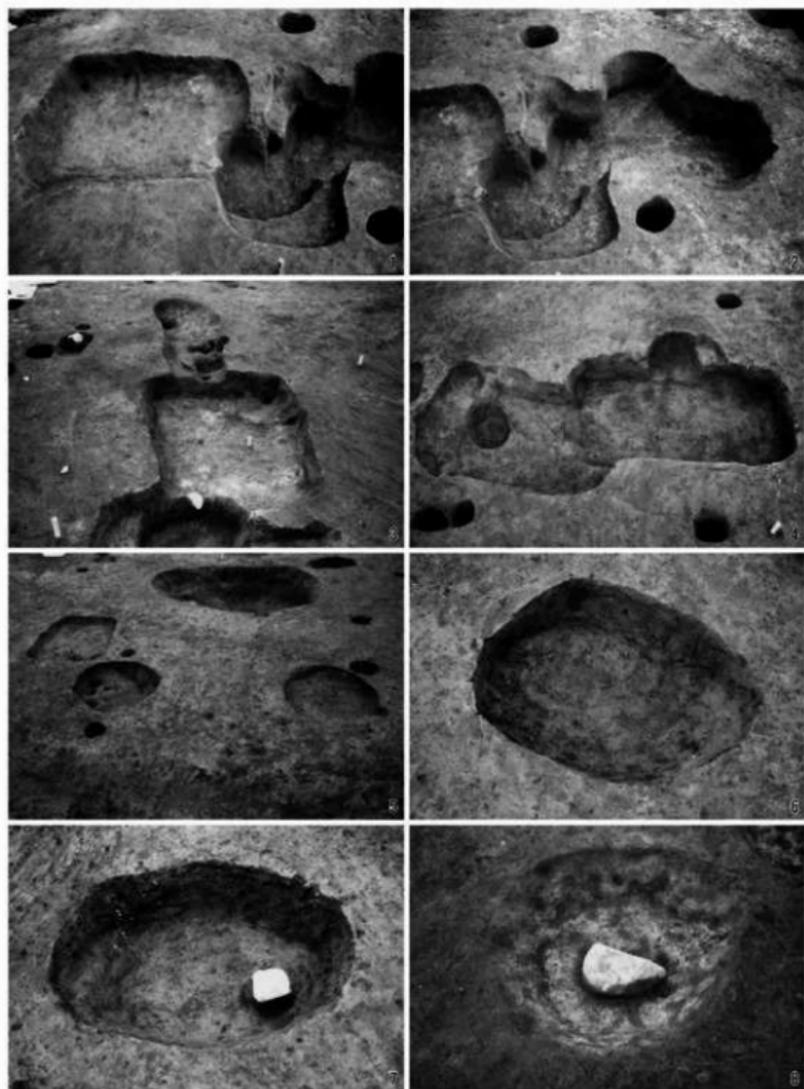
(1·2: 79号、3: 80号、4: 81·82号、5: 83号、6: 85号、7: 86号、8: 87号)

图版 10



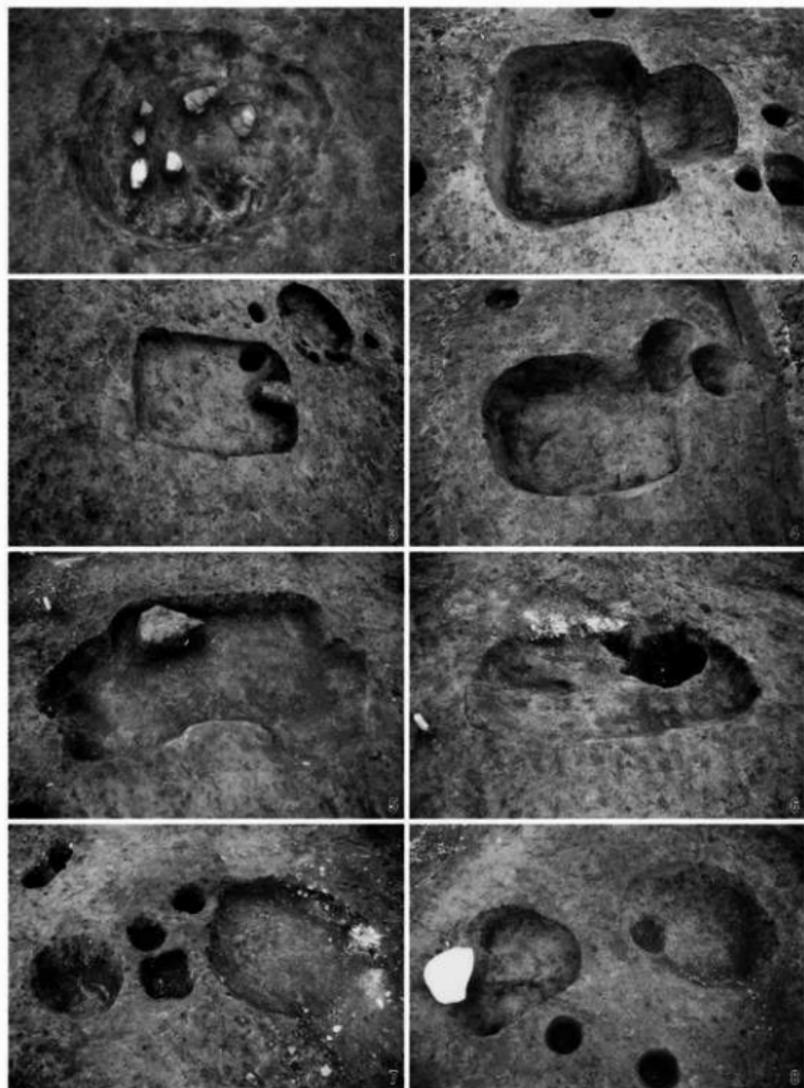
土坑(3)

(1: 97号, 2: 101号, 3: 111号, 4: 114号, 5: 118号, 6: 121号, 7: 122~124·126号, 8: 127-128号)



土坑(4)

(1·2: 132~136号, 3: 117-132-133-136号, 4: 144-145号, 5: 147-148-155号, 6: 149号, 7: 150号, 8: 151号)



土坑(5)

(1: 152号、2: 154号、3: 147-155号、5: 157号、6: 158号、7: 159-160号、8: 161-162号)



住居址出土土器
(1~6: 1号、7~8: 4号)



第1号住居址出土土器(1)



第1号住居址出土土器(2)

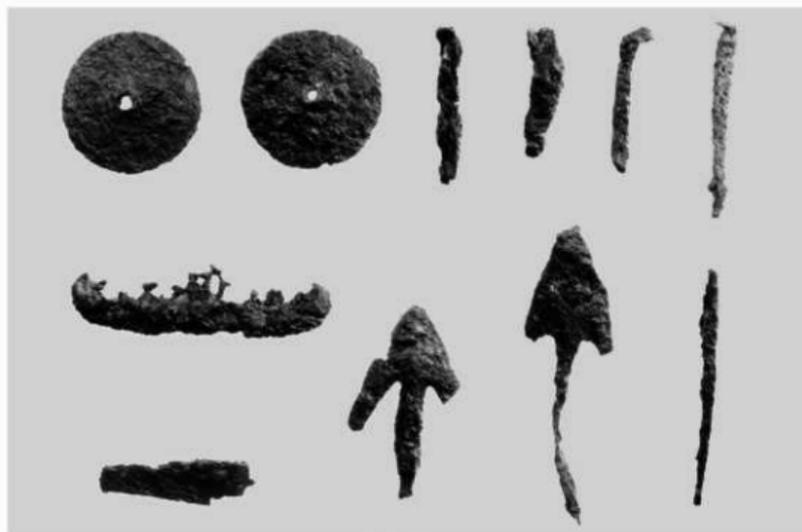


第2号住居址出土土器



通溝出土土器

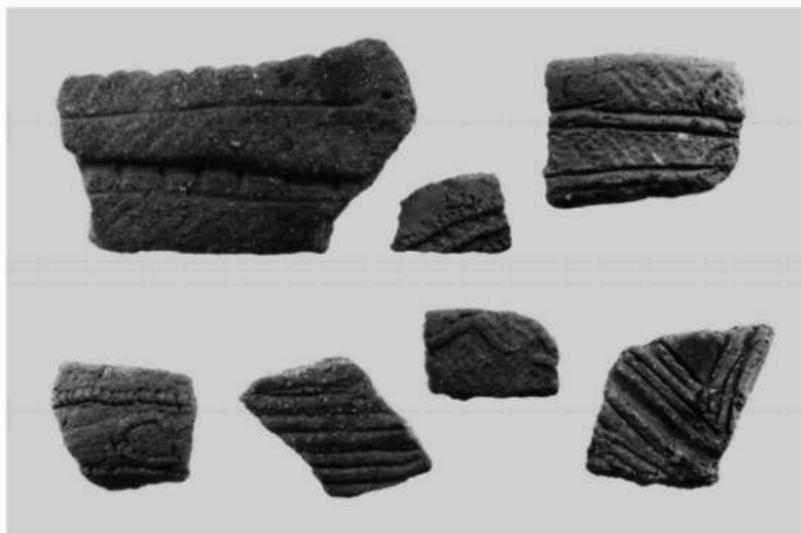
(1・2: 2号住, 3: 41号土坑, 4: 57号土坑, 5: 2号土坑, 6: 33号土坑, 7: 19号土坑)



鉄器



遠構外出土土器 (1)



遠構外出土土器 (2)



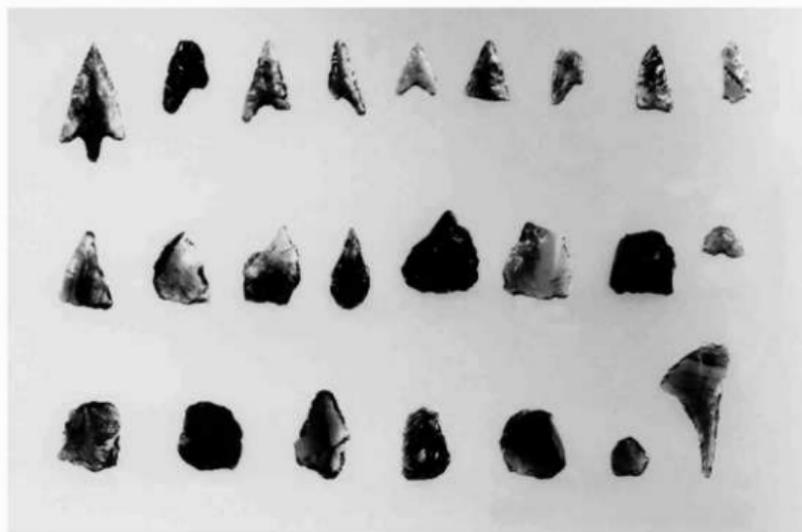
遠構外出土土器 (3)



這構外出土土器 (4)



石器 (1)



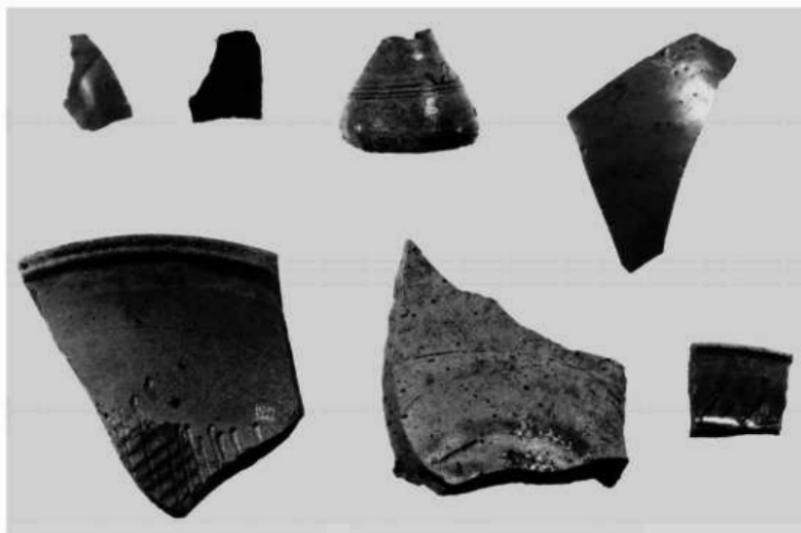
石器 (2)



石器 (3)



陶磁器 (1)



陶磁器(2)



第128号土坑出土古銭

報告書抄録

ふりがな	しんまちはらだみなみいせき						
書名	新町原田南遺跡						
副書名	昭和63年度団体営園場整備事業新町地区に伴う発掘調査報告書						
著者名	福島 永						
編集機関	辰野町教育委員会						
所在地	長野県上伊那郡辰野町中央1番地 Tel (0266) 41-1111						
発行年月日	1995年3月15日						
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積
		市町村	遺跡番号				
新町原田南	長野県上伊那郡 辰野町大字伊那 富4556番地 他	20382	62	35度 58分 51秒	137度 59分 12秒	19840519～ 19841007	5,400㎡
所有遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
新町原田南	集落址 居館址	縄文時代～ 中世	竪穴式住居址 5 土坑 124 居館址 1	縄文土器	中世の居館址が新しく発見された。また中世の住居址も出土した。		

新町原田南遺跡

昭和63年度団体営園場整備事業
新町地区に伴う発掘調査報告書

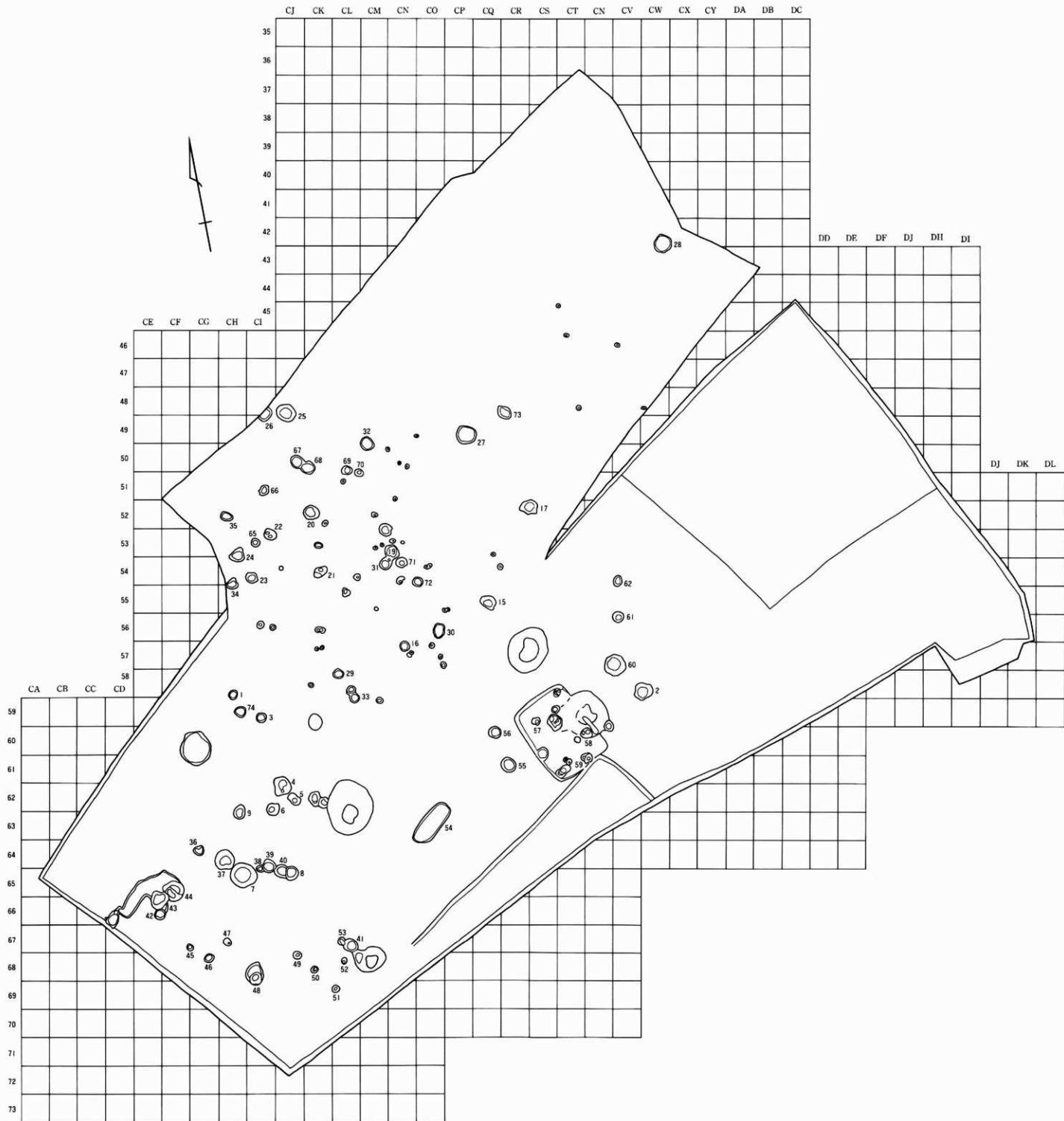
発行日 平成7年3月15日

編集
発行 辰野町教育委員会

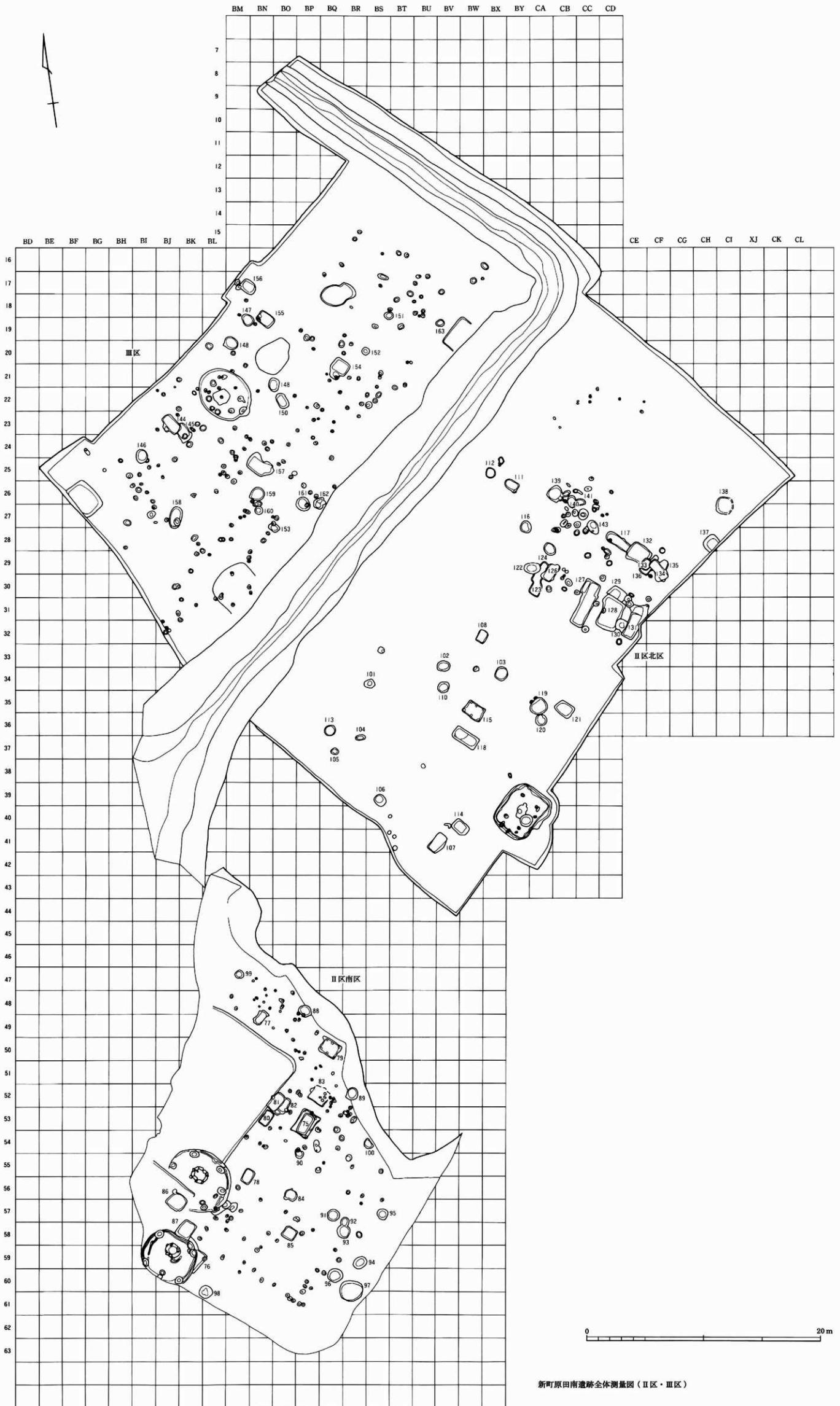
〒399-04 長野県上伊那郡辰野町中央1

☎0266(41)1111℡

印刷所 日本ハイコム株式会社



新町原田南遺跡全体測量図 (I区)



新町原田南遺跡全体測量圖 (II区・III区)